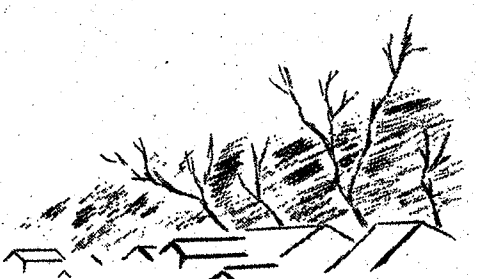
時報 No.5

1953.6

大阪大學山岳會

目次　第五号

一、針木谷の憶い出……篠田軍治　1
一、進むべき道 ― 今後の課題 ―……大島輝夫　2
一、一九五二年夏山カクネ里合宿……9
直、接尾根……9
主　稜……12
中央ルンゼ……13
ピークリッヂ……14
一、一九五二年　冬山……16
(一)冬の聖岳……16
(二)冬季南アルプスの積雪と天候について……20
一、一九五三年　春山
後立山逆縦走……23
(一)計　画……24
(二)行動記録……25
(三)天候について……33
(四)食料報告……34
(五)会計報告……35
一、山行記録（一九五二・六月 ― 一九五三・五月）……35
一、集会記録（一九五二・六月 ― 一九五三・五月）……44



針木谷の憶い出

篠田軍治

今年の一月四日に久し振りで針木谷へ入つて見た。ほんの日帰り。朝早く大町へ着いて、駅を六時半に出て、大沢の小屋のある丘の見える所まで行つて引返して、大町へ着いたのが晩の九時。その晩直に夜行で関へ行つたのだから、随分物好きな話だが、こんな山行は一人でなければできない。一人となると歩きながら現役時代の憶い出が次ぎ次ぎに浮んで来て愉快であつた。

出発の時に、忙しくて地図が見付からない。止むを得ず四ツ谷と大町の間を円太郎馬車に揺られて通つた時代から持つていた五万分の一の大町を一枚だけ。立山図幅は持たずに出掛けた。この地図には蒲湯へ行く今のバス道は載つていない。だから大町から歩き出すにも旧道を通つた。大出まではバスで行けることは知つてはいたが、天気も好かつたのでモルゲンロートを心ゆくまで眺めたいという気持からであつた。白沢までの道がよくなつたことは聞いていたので別に驚かなかつたが、途中に利用できそうな小屋が随分あるのは心強いと思つた。この行、大沢まで行つて大島、久保、坪井のパーティーと一緒になる積りであつたが、扇沢を過ぎてからの下りのシュプールが二人のものであつても、三人で行つて一人だけ残つている筈はないから三人の予定が二人になつて、二人とも帰つてしまつたのであろうと判断して、白沢の丸木橋までは是非明るい中に戻り度いという気持になつて、目の前に大沢を見ながら引返すのも惜しかつたが四時少し前に引返したのであつた。

始めて針木の谷へ入つたのは中学四年の時、大正八年七月二十三日で早稲田の山岳部で活躍した中島泰一郎、後に東大時代前穂あたりへよく登つた三輪俊一等の諸君と一緒だつた。何しろ龍王から浄土へ出るのに今の永島尾根の北側の雪渓を危く下りかけたという怪しげな案内人を連れての山行だから、高山の小屋で夕立の雨宿りをしてから、こちらも血気にまかせて白沢扇沢とずんずん案内人を放つておいて進んで、やがて大沢らしい所に出た。河原に近い所にはキャンプの跡らしいものはあつても小屋は見えない。暫く迷つた末、念のため少し先の方へ行つてみると道傍に小屋があつた。こんな経験があつたので小屋の位置は正確に頭に残つていた。

その後三年、松高の三年の時の五月再び針木谷に入つた。その前の年の四月に四高の沢田武太郎氏の一行が立山温泉からわかんで針木越に成功しているし、その年の三月には槇氏の一行も槍の登攀を行つており、又自分達でさえも四月には常念山脈へは行つていたので別に大した山行とも思つていない。美ヶ原あたりへ行くような気持ちで出掛けた。それでも長野県に一本か二本しかないピッケルの中の一本を矢沢米三郎先生から借りて行つた。そして大沢小屋の地点まで来てみたが、どうしても小屋が見えない。確かにこのあたりと思われる地点を捜してもどうしても見あたらない。散々捜した挙句、ふと目の前を見るとどうも納得のゆかない岳樺の切株がある。雪の深い所の切株も一寸変なので試みにその附近の雪を除けてみると、それが小屋の屋根の一部で、小屋は屋根が落ちていたのだった。掘り出して（ピッケル一本で）中へもぐり込んでみると中は一面の水で到底泊れない。止むを得ず附近の大木の中の都合のよいのを捜して、木とそのまわりの雪との間に出来た空洞に一夜を明かし、翌日は針木峠から蓮華岳へ登つた。これが雪中で露営した最初の経験だつたし、雪の中でやつた焚火にどうやら成功したのもこの時が最初であつた。

この時のこと、そして又始めて厳冬期の中房谷へ高等学校の一年の時に単独で入り込んで、稀に見る大雪に阻まれて信濃坂までも行けずに引返した時のことなど思い出しては、軽い粉雪の中を歩くことは誠に心地よいことであつた。

進むべき道

ー今後の課題ー

大島輝夫

今年は日本の山岳界にとつて歴史的な年となつた。言う迄も無く日本山岳会が主体となり我が国で始めて八千米級のヒマラヤ・マイアントに対して挑戦したからである。之を書いてゐる現在もう頂上の攻撃にとりかゝつてゐると思うが、時報の出る頃には成否が決つてゐるであらう。そして我々はその結果に多大の期待を寄せてゐる訳であるが、登頂したにしろ登頂出来なかつたにしろマナスル隊の経験は今后の日本の登山界、特に我々学生登山界に大きな影響を与えるであらう。即ち「日本アルプス」は氷河も無く、高度も三千米そこそこで「ヨーロッパア

ルプス」より大分低いが、冬の天候の点では本場よりずっと悪いと言はれてゐる。その「日本アルプス」でトレーニングを重ねてきた日本の山岳人がヒマラヤの八千米級でどの程度の活躍を示すか。又、やはり「日本アルプス」の経験を基盤にしてやゝ準備の時日の乏しい憾みはあつたが、とにかく日本の科学技術を盡した装備の可否、又今回の様に異なつた所属団体に属し、場合によつては平常やゝ異なるイデオロギー（といつては言いすぎるなら異なるカラー）の下に登山を実践してゐた人達のいはゞ混成隊で、然かも出発前に遠征隊としてのきとまつたトレーニングをする予裕も無く出発したけれども登頂という目的に対し如何に結集するか。特に今回の如き年令の構成が妥当かどうか。高度順化を含めて日本人は平均して何才位迄が八千米級の登山に最適の年令であるか。又外国では余り行なはれないと聞いてゐるが、日本の浮生登山界で特に盛なヒマラヤを念頭に置いて行う極地法的登山の経験特にその運営法（天幕の進め方といつた事）高所露営の体験等がどの程度ヒマラヤで役に立つか。以上の様に技術、装備、隊の構成、隊員の年令、日本人の高度順化、極地法の運営、日本アルプスにおけるトレーニングの成果といつた風にあげてゆけばマナスル隊の得る経験が如何に今后の日本の登山界に進歩と影響とを及ぼすかが分るであろう。やゝ逆説的な変な言い方であるが、いきなり登頂に成功するよりもむしろ今回は失敗した時の方がその反省と再挙とを通じて日本の登山界により多くの進歩をもたらすかも知れないのである。

一方では今回の如く、日本山岳会の主催により色々な所属から隊員が選抜されたことは今後自己の所属する山岳団体単独ではヒマラヤ遠征を行う事が色々な状勢から実現出来さうにない場合でも、平常ヒマラヤを目標において十分精進をして居れば個人としてヒマラヤ遠征に参加出来る少くとも可能性が生じたわけであり、日本全国の若き情熱に燃える山岳人にとつて今后大きな希望と目標が与えられた事となり、日本全体の登山界の隆昌の一つのきっかけとなるであらう。又従来国民体育大会の山岳部門について色々と論議があるが、マナスル隊の編成に団体が一つの重要な役割を果してゐる事も否定出来ないことの様に思はれ、植会長がヒマラヤ遠征と殆ど同程度に団体山岳部門を考えてゐると言はれるのも共鳴出来ることである。

マナスル隊が出発するに先だつて早大は多年のヒマラヤに対する計画の一端としていはば高度に対するトレーニングという

つた意味で南米アコンカグアに遠征し成功の中に帰朝した、神戸における帰朝歓迎会で関根氏は「大体予想通りであつたがやはり高度に関しては百聞一見に如かず経験しないと分らないし又内地の山ではどうしようも無い」といつた話しがあつた、更に詳細な報告に接する機会の早い事を待望する次第である、一体平常山行を共にしてゐる二つのグループの中だけで十分ヒマラヤに行ける実力のあるメンバーが揃い実際に行ける條件にあるのなら、そのグループのみで遠征を行う事が最も理想的であるのはいう迄も無い、むしろ問題は国外、国内の客観狀勢がそれを許すか、或いは登頂する為には果して一つのグループのみの遠征隊をつくるという事が絶対必要かどうかといつた事である、いづれにしろ早大山岳部の多年のヒマラヤを目標とした実践ともはや国内では略完成したといつても差支えない極地法の形式とをヒマラヤ、八千米級で経験する機会がある事を祈る次第である、

次に国内に目を転じると今春特に気のつく事は剣より西穂（慶応）白馬より北穂（法政、信大、北穂会合同）を始め私達の針之木より白馬と縦走の行はれた事である、剣より西穂といつた大距離の縦走は戦前には例が無く戦后早稲田根より槍（関西登高会）に始まり北岳より聖（慶応）大雪山頂（北大）と発展して今春に至つたもので春の縦走は記録的にはもうなし盡された感が深い、もつとも以上のコースを延ばす（例えば甲斐駒より光岳）逆縦走を行う（場合によつては正縦走より困難）とか新味を加えた計画もある試であるがむしろ今后は以上の傾向の上にのつて積雪冬の稜線の縦走が取り上げられるべきである、いう迄もなく日本アルプスの主山脈の冬期の縦走は最も困難な課題の一つであり、今迄冬期当長い縦走を行つた例は案外少く主なものは立教の二回行つた白馬より鳥岳、東大の燕槍、歌枝の穂高の記録、織田氏等の木曽駒、加藤文太郎氏単独の有峯より鳥帽子等である、以上の冬の縦走をとりあげる事と並んで考えるべき事は従来縦走を行うには秋に荷上をして置くとか山小屋を利用する事が多かつたが、アンナプルナ隊に刺激されて軽量テントが日本の山でも取り上げられる気運になつたしするので、今后は春は勿論冬に縦走を行うにしても、秋に荷上げは全く行はず全く山小屋にたよらずに行う事が望ましい、特にヒマラヤを念頭に置いてる場合はしかりである、この様な努力は一見すると華やかさが無く又記録的には距離が短かくなるかも知れないが、私達の経験

かろいつても山小屋を利用した場合は学校山岳部として蓄積されてゆく経験の上に寄与する所が少い様に思はれる。又縦走と同一傾向のものとして曾つて大阪商大と関大とが同時に成功した黒部の横断の如き計画が再び取り上げられてよい時期ではあるまいか。私達のリーダー会でも今后の対象の一つとして考えられてるるが、法政が数年前唐松より剱を冬に計画して中止したまゝになつてるるし、冬の雪崩で遂次でなくなられた同志社の松本君が、春に黒部を渡つて剱への計画を合同でやらうとよく私達に言つてゐたのが思い出される。

次に目を極地法に転じよう。極地法はヒマラヤの登山が盛になるにつれて我が国で行はれる様になり現在ヒマラヤに対するトレーニングとしても勿論行はれるが、他方では人数の多い学校山岳部で全員が確実に一つの大きな計画の達成に協力し団体としての力を発揮出来、しかも高処露営等の練習も盛に行う事が出来るのでヒマラヤを離れて日本の山だけを考えても行う価値があるわけである。そして戦后特に明治、早稲田等により穂高を中心にいくつかのすぐれた極地法が行はれ、現在では或るルートを通る為に極地法をえらぶというよりむしろ極地法の練習の為に適当なルートを選定する状態である。そして形式的には一応完成したと言つても良いので今后は縦走春行つた所を冬行うとか、距離を延してキャンプ数が必要な位の長距離、長期間の計画をたてるとか、テントを今迄より高処に進める（例えば北尾根をルートとする時前穂高から奥穂位迄テントを上げる）或いは安全確実の趣旨と反しない範囲でスライドを延し縦走よりも最終攻撃態勢が早くとれる様にするとか（此の事はヒマラヤでは特に大切）或ひはその為には縦走の極地法の完成より多小はずれた事も行う。又之に関連して今迄テントが4つ必要だつた計画を3つ位で行う様に努めるといつた様な極地法形式の一層の発展が考えられるであらう。之を可能にする為には、やはりナイロン等を思い切つて使つた軽量装備の利用が必要である。以上は極地法形式の発展をはかる事であるが、地形的にも制限があるし又戦后は個人的には戦前より見劣りがしても Rock としてのきまとまつた力で戦前以上の計画を二なしてゐる感が深いので個人的技術の向上をもめざして最終キャンプより出発してヴァリエーションルートを探るといつた事が盛になるであらう。早大が一昨年春行つた西穂より滝谷を目標としたのは此の表れであるし又日大が昨冬に前穂東面と奥又白より槍迄の極地法をくみ合せたのも類似した行き方である。

尚極地法のルートして穂高では殆ど歩かれ盡した感が深いから今后ヒマラヤのトレーニングとして極地法を行つて行く時ルートとしては同じ所を使つて前述の様な試登を行うという事になりかねないが　ヒマラヤが現実のものとしてすぐ行ける時は良いが内外の情況から何年先かも分らぬ時　又は山岳部員の中で実際にヒマラヤに行ける恵ぐまれた人が少数である時に果して先輩時代から何回も行はれた同じルートを繰返すという事を現役部員が我慢してゆけるだらうか。何らかの意味で精神的に新しい目標を国内的にもかゝげる必要が生ずるのではあるまいかも相当問題になるであらう。もつとも日本の冬山や春山も延未の夏山の様にトレーニング場であると割り切つて考えて了えばそれ迄であるがその場合はやはりヒマラヤが現実に行けるものである事が必要であらう。又何時も同じ所で合宿してゐるとその地形等に慣れが出来て全く始めての所に行つた時に思はぬ失敗をすることもあり得るだらう。

次にヴァリエーションルートの登攀について記さう。ヴァリエーションルートの開拓に殆んどの山岳団体が主力を集中した時代も昭和十年頃で終りをつげその后残された所も次々に陥落し戦后には屏風岩の正面の登攀も行はれた。現在夏登られて積雪期未登攀で残つてゐるのは万人が目をつけてゐながら極めて悪い所か　悪い事は悪いがスケールがやゝ乏しい所か　案外忘れられてゐる所かである。後の二者は早晩完登されるであらうが最初の例に入るものとしては　北岳バットレスでは中央稜及びザイルを夏に固定して一応翌年の初冬に登られたが第二尾根、穂高で言えばヂャンダルムの壁、五月に岩稜会によつて登攀されたが明神最南峯東壁、奥又白四峯壁正面ルート及び甲南ルート　カクネ里では正面リッヂ及び中央ルンゼ。剣では チンネの正面ルートといつた所があり谷川岳の滝沢直登も此の中に入るのであろう。一方では今迄春に登られて冬には未登攀の所が沢山ある。南アルプスでは冬もかなり晴天が續くからそれ程冬と春を区別しなくても良いかも知れぬが北アルプスでは当然春しか登られてゐない所を冬登ることは大いに意義のあることである。然し降雨の関係もありルンゼ等では冬は殆ど不可能の所もあるであらう。尚前記の残された所は極めて困難を予想されるものであり岩稜会の明神東壁の登攀記録でも示される様に全く数年に亘る試登と忍耐を必要とするかもしれない。かゝる目標に多人数を容する学校山岳部が全力を傾ける時　実際登るのは先づ二人であるしやゝもすると新人のトレーニングと部員全体

の技術の向上が十分でなくなり又多くの場合高処露営の訓練も等閑視され易い。従つて北岳バットレスの様にマプローチの長く必ず高処露営を必要とし多人数のサポートを必要とする場合を除いてはむしろ人数の少い学校山岳部か社会人団体の対象としたた方が良いのではあるまいか。或いは冬に合宿を行つて春にヴァリエーションルートをねらうのも良いのであらう。

こゝで一言附け加えておくがヴァリエーションルートの登攀には今迄山小屋か比較的低所のキャンプをベースとして出発する事が多かつたし、又体の條件を良くする為にもそれが必要であつたので、すぐれた登攀を行つた事のある登山家の中で案外いはゞ森林限界以上の高処露営時にその長期滞在の経験のない人がある。小谷部全助氏の如く「天幕の経験なんかは貴重な時日を専ら割いて練習する必要はなく登山技術の上からみれば練習の主体となるべきものは飽く迄登攀そのもの、即ち悪場の克服であるそれが延いては山の味いを深くする所となる」といつた考え方もあるが、然しやはり私達の乏しい経験からではあるが、高処露営時に雪洞よりテント並びに極地法の運営をヒマラヤを考える人はやはり日本の山でじつくりと身につけておくべきものと思う。又B.C.とかキャンプI程度の経験からだけで極地法なんか易しいといはれる方もあるが、極地法は当然キャンプの数が増すにつれて飛躍的に計画をたてるだけでもむづかしくなるものであるからその点も注意が必要である。メルクルのナンガパルバット、ウィスナーのひさいたにの米国隊の悲劇の原因は彼等は確かにヨーロッパアルプスの壁の登攀の経験は豊富ではあつたが極地法的経験が不足してゐたからであるというのは私の独断にすぎないであらうか。従つて若しヒマラヤを念頭においてゐるのであれば、前述の極端な悪場の初登攀をねらうよりも従来何回も登られた所で極地法を身につけるとか、又はヴァリエーションルートをねらうにしても従来何回も登られてゐる所で良いからなるべく高処キャンプを利用する方針をとるべきである。又昔高処露営の研究の始つた頃に「登高行9号」に示される如く慎重が盛に行つた三千米の頂上近くにテントを張り稜線をどんどん歩くといつた事が地味ではあるがもつと行はれても良いのではあるまいか。記録的な華やかさは無いが若し冬の剣や穂高の稜線をテントをベースにどんな天気でも歩ける様になつたら全く恐るべき技術の持主と言はねばなるまい。

最後に今迄我が国では登攀に要した日数又は時間の早いのを

養つたりする事は無くそんな話しをすればマラソンではあるまいしと笑い話になる位であつた。むしろラツシエで登る時は所要時間の長さからその悪さを養ることもあつた。所がクセジュ文庫の「山のスポーツ」に「アルプス地方において成績をあげる可能性は最後の処女峯と最后迄とり残された新ルートともになくなりはしなかつた。先輩たちの要した時間を大幅にちぢめることが行なわれてゐて、グランド・ジョラス のウオーカー突起はまず二回のビヴァークと三日で登攀され次には一回のビヴァークと二日で最后には一日で完登された」という記事がある。之は天気の安定したヨーロッパアルプスの夏山についての事であるらしいが、日本でも此の様な事が云々される時代が来るかも知れない。非常に場合により條件の異なる日本の積雪期の山でかゝる事を云々するのは全く誤りかも知れないが 縦走等において所要日数の少い事は必要然的にどんな天気でも歩ける事を意味し、短い日数で歩く事はやはり技術的にすぐれてゐる事を意味するわけである。現に今迄穂谷の第4尾根は春でも二回に分けて登られてゐたのを一日で完登する事を早大が企てたが成功しなかつた。

以上マナスル及びアコンカグア遠征と関連して国内の登山界について縦走、極地法、ヴァリエーションルートと書いて来たが要約すると国内では極地法は展開のスピード化が要求され形式上の完成に近づくと共に、更により困難な対象と個人技術の錬磨を目標にして、今迄の如く稜線の往復だけでなく最終キャンプからヴァリエーションルートをねらうといつた事も実施されるであらう。他方では縦走にしろヴァリエーションを登るにしろ最后迄残された所が除々に陥落してゆくであらう。そして何れの場合でも軽量装備の利用が飛躍的な発展の重要な因子となると予想される。

最后に我々の目標は何であらうか。それは春よりも冬に、支稜よりも風雪の激しい国境の主稜線を行動する事である。その間春には新人のトレーニングに、又は新しい次の目標の地域を求め、或いはヴァリエーションルートへと一つにこだはらず登山すべきであらう。そして絶えず団体としての力の向上は勿論ながら構成各個人の技術も一層向上を計りながら、冬春の計画を通じて将来のヒマラヤ遠征に役立つ様なデーターと経験の蓄積につとめねばならない。ヒマラヤにおける最大の目標は何人といつてもエベレストを始めハ千米級の登頂であるが 一方では既に縦走並びにヴァリエーションルートの時代も始つてゐる事

も我々の注目すべき事である。不幸失敗はしたが（アタック隊に対するサポートが甚だ不十分だったと思う）フランス隊のナンダデイーの縦走計画は此の表れである。

以上一耶年位からリーダー会を支配してゐたと思はれる思想を骨子として私の考えを述べた。学生登山界の常識と思はれる事もあるが　一方では私の独断的意見も少く無いと思う。

現役リーダー諸君の批判と実践を期待する次第である。新人諸君の為には私達の現在の山に対する考え方が如何なる主観的客観的條件の下にどの様な経過をたどって育ってきたかを書くべきであるが他日に譲り度い。

マナスル隊ノースコル高度七千米に第ハキャンプを建設の報に接しその苦闘を思ぶと共に更に一層の奮闘を祈りながらペンをおく。

一九五二年夏山
カクネ里合宿

一九五一年夏戦後初めてのカクネ里に足を入れ　カクネ奥壁に手を染めた我々には　尚　其処に残された幾多の問題を持ってゐた。その上一九五二年度の最終目標として後立山逆縦走を目指したのだから　その事も考へ合せて　「カクネ奥壁の完登」と夏山合宿を目論んだ試である。即ち未登の直接尾根を主目標とし、その他の尾根及び荒沢の方をもつけ加へた。

さて今夏の合宿は丁度切雨の出来た遠見尾根より、白岳沢を、経て　容易にカクネ里に入る事が出来た。そして爾後の合宿を極めて円滑に展開出来た事は　昨夏一回のカクネ合宿経験の尊い贈物と言へよう。

さて　主な登攀報告を次に記し　その他は　山行記録にゆずった。

直接尾根　パーティ　川島・坪井

七月二二日晴

B.C（五〇〇）―洞窟滝（六〇〇―六三〇）アンザイレン―直接尾根取付（七〇〇）―草付テラス（七三五）―ロックテラス（八五五―九三〇）―小舎テラス（一〇三〇）―中央ルンゼとのジャンクション（一一〇〇）ザイルを解く―北槍頂上（一二四〇）

昨日の偵察で、取付迄の雪渓の様子はよく分つていたから、楽な気持でB.Cを出た。夜は明けていたが未だ日は射していなかつた。洞窟尾根の裾をまいて奥の雪渓に下りた。すぐ目の前の割目から洞窟滝の不気味な姿が僅かに見え凄まじい水声が洩れて来る。ここでアイゼンをつけアンザイレンしてコンティニュアスで登る。滝は完全に埋まつていたから左端迄トラバースするだけで簡単に済んだ。四十五度の急斜面を持つ奥の雪渓は、至る所クレバスで引裂かれていたが、大体右端が通れる。雪渓中央より右寄りに、赤黒く土の着いた落石道は、落石の量と速度の大きな事を明瞭に示していた。滝から三十分で取付点に達した。赤茶けルンゼは敬遠して、かなり下方から岩場に取付き雪渓に平行に右上へニピッチ簡単に登つて草付テラスに達した。長さ十米にも及ぶ大きなテラスでビレイ用の木もある。正面は、垂直に近いスラブ。左は恐ろしいく急なブッシュ帯に消えている。テラス右端に上から落込んでいる草付チムニーを登る積りで下降行つた所、チムニー外壁をなすブエースが登れそうに見えたので、テラスから一米右へトラバースした右直登する。足場悪くやり直してピトンを打ち、左足をのせる。岩は硬く盛当なホールドもあり、リスも多い。更に一米登つてからもう一本高らかに歌わせて釣上を行い、右へ一米トラバース、手を思い切り上方に伸ばして大きなホールドにかけ、力まかせに攀ぢ登るとチムニーの上に出た。脆いが順層の緩斜面である。ザイル一杯に登つて第三のピトンを打ち、ルックの釣上を行う。第三のピトンから右上にルートを取つて赤茶けルンゼ「下の滝」の上に出ると、ここに一坪に近い完全に平な岩のテラスがあつた。（ロックテラスと呼ぶ）岩床の凹みには水も溜つていたのでここで食事をとる。ここ迄四ピッチ二時間要した訳であるが両腿の岩壁が思つた上り早く済んだので気楽であつた。

赤茶けルンゼはここから再び傾斜を増し、下から見ると オーバーハングに見える程急な「上の滝」になつているが、この滝を右リッヂ側は、まばらに草の生えた急斜面で登攀不能である。

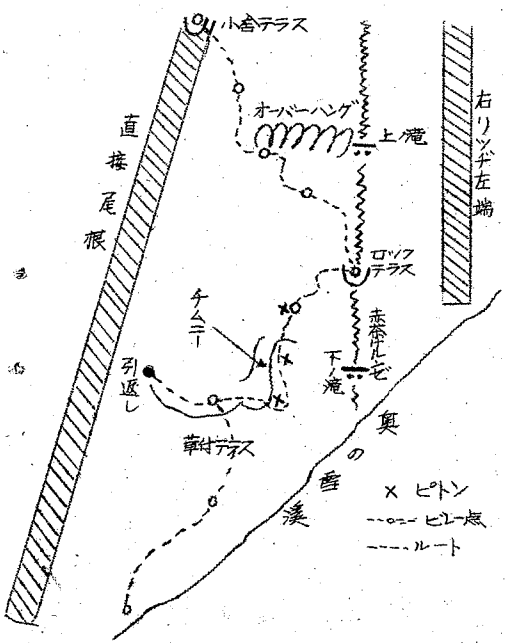
「上の滝」上部は右リッヂ直接尾根間の浅くて緩い草付ルンゼで、赤茶けルンゼの名に反して緑一色である。「上の滝」の

左側に上端が庇の様に突出した完全なオーバーハングが続いている。之は縦走路からもそれと認められる程顕著なものである。

食后、我々は左上方直接尾根のブッシュに入るべく、オーバーハング直下目掛けて登り出した。じめじめした湿りの脆い草付の岩場は気持のよいものではない。二ピッチでオーバーハング直下に出るとすぐ左側のブッシュに入り直登一ピッチ。傾斜が急な為ルックの重みで空中へ投出される危険がある。しかし直接尾根登攀は、実質的にはこゝで終りであった。後は傾斜の緩くなった尾根のブッシュ漕ぎに終始するのである。

次の一ピッチを簡単にすませると広く開けた小舎テラスに出た。こゝからカモシカ道らしいのに蹤いて尾根の右側をからみながら三ピッチブッシュ漕をして又かなり開けた所に出た。左眼下には中央ルンゼ左岸をなす直接尾根側稜の凡いピークが見える。之はカク木里から見る時、顕著な鋭い岩峯となって見えるものである。右上方には右リッヂの特徴ある白いガレが近々と見られた。此処が中央ルンゼの終端であることは三日后に中央ルンゼを登った際に分った。ザイルを解いて更にブッシュ漕を続けたが、間もなく左の中央ルンゼに下りた。北壁もこの辺り迄来ると尾根とかルンゼとか区別するのも大袈裟で一寸した襞に過ぎなくなる。硬い階段状のルンゼをどんどん登り、ルンゼが開いて草付に消える所で小さなテラスを見付けて休む。辺り一面お花畑で之こそ我々二人だけの花である。右にトラバースして再び尾根上に出てみると、こゝは右リッヂと直接尾根とのジャンクションの上部で、尾根の向う側、即右ルンゼ側は低いブッシュと散岩と柔かい地衣類に覆われたカモシカの牧場であった。牧場をゆっくり登り北槍頂上で坪井と握手をかわしたのは未だ一時前であった。

（川島記）



主稜登攀記録

パーティ　田島・山本

七月廿二日　晴時々ガス

午前五時B・C発一路雪渓をつめる。主稜向つて右の雪渓に入り正面尾根末端附近に至ると主稜はこの辺りに於て二ヶ所程馬の背の様な部分を形造りしかしその一つは雪渓から手も届かんやうな高さしかない。そしてこの附近の状態は小石まじりのザラザラの斜面であるが充分安全に通過出来、上部は草で少し藪をつけてゐる。此の部分にはシエルンドもなく、雪渓から直ちにザラザラの斜面に移り僅かに二三分でリッヂ上に出られた。

リッヂのすぐ左下（向つて）はルンゼとなつておりBCからもそれと認められる残雪がある。主稜初登の京大パーティは末端附近より取付いてこのルンゼを登つた様である。私達はリッヂ通しに藪をこいで第一のテラスに出る。取付より約三十分。これからは大体京大と同ルートを辿る。ここから左下に見えてゐたルンゼは二つに分れ、その中央に小尾根が一本急角度に落ちてゐる。ルンゼは左右とも滝となり、左は紫黒色のオーバーハング、右は甚しく困難な容相を帯びた一枚である。一方主稜リッヂは急傾斜の岩稜にブッシエをつけよしんば登れるとしても不必要に体力を消耗するだけである。結局私達の採つたルートは向つて左のルンゼへ少し廻り込んで例の小尾根の左側の草付に取付くものである。少し登りかけたが極めてアンサウンドで山靴をワラジにかえ浮石をより草根を握つてようやく草に覆れたテラスに這い上ってホッとする。

次の一ピッチで例の小尾根の裾を巻いて右側のルンゼに出る。丁度滝の中途にあるテラスが格好のビレイポイントを提供する。こゝから滝を直登するのは無理だし、例の小尾根に再び取付くことなど問題外、唯一のルートは主稜リッヂに向つて右斜上に登るもののみである。アンサウンドと草付の苦しい登攀。

幸に主稜リッヂのすぐそばにテラスの存在に気付く。このテラスの上は主稜リッヂ上のブッシエを潜いで登る。結局第一のテラスからこゝ迄の三ピッチが前後を通じて最も悪い所だったわけである。一ピッチ登つてテラスに出たがこの上はブッシエが凄い為少し登つて左のルンゼにトラヴアースする。例の右側の滝の上部のルンゼである。三ピッチ程登り悪い草付となつたので更に左のルンゼ（紫黒色の滝の上部に当るもの）に移る。丁度そこに残雪があり水がある。こゝで第一回の晝食。時間は

十時半　そこから上のルンゼはB・Cから見ることがラガラの様に思はれるが実際は快的なもので六ピッチを四十五分で登りザイルをとる。ルンゼを出来るだけつめて右側のリッヂに出で腰松を潜いでポツカリ東尾根の藪緑に出る。すぐ踏跡を伝つて北槍のピークへ十二時五十五分に着くことが出来た。直接尾根パーティと堅い握手。

（田島　記）。

中央ルンゼ登攀記録

七月廿五日　晴後曇・雨　（パーティ）川島・山本

時間記録　B・C.（六・三〇）―取付（八・〇〇～八・四五）―第五滝上（一二・二五～一二・四五）―直接尾根ピーク横テラス（一六・二五）―北槍頂上（一七・三〇）―B・C.（二〇・一五）

昭和九年七月の試登以来第三登（昭和廿三年七月）に到る迄南壁パーティによりしかトレースされてゐないこのルンゼは、北壁中心部に魔神の斧で切裂かれたように狭く深く喰い込み、群飛ぶ岩燕の鋭い羽音が両側の垂直に近い岩壁に跳返り恐しい落石の風を切る音、陰惨な暗い谷間の様相と相俟つて登攀者の心理を極度に圧迫する。

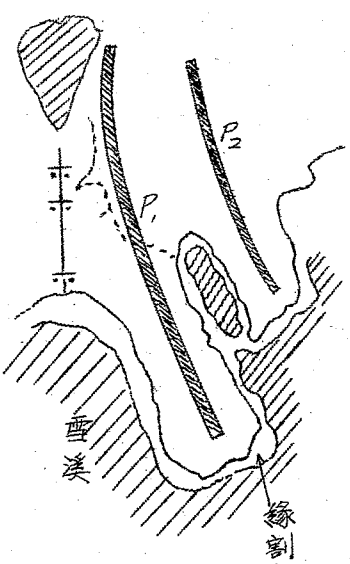
ルンゼ入口までは、雪渓が続いていたので非常に容易であつた。右側のアンサウンドな岩場に取付いたが非常に悪くここでザイルをつけワラジにはきかえた。右側からトラバースし、ピトン一本使用してニピッチでルンゼの底に立つ。第一第二の滝は既に下になつてゐる。ルンゼ一杯に転つているスノーブロックを乗越えると短い第三の滝があつた。滝の底右側を登り、第四の滝は滝底チムニーを簡単に登る。第五の滝は左右岩壁とも登攀不能で滝正面右側の七十度位の草付を登る外ない。辛じて立てるホテラスにピトンを打ち、山本を上げる。この上及び右側はオーヴァーハングの脆い岩に草付を交へ登攀不可能である。草付をはづれまで登りそこから左へトラヴァースせんとして錆びたカラビナのついたリング・ハーケンを発見し、これを使用して左の岩の割目に生えた小さな木へトラヴァースし、こゝで又ハーケンを見つけ、それに依つて滝底チムニーに達した。雨さきつたチムニーを二米漸くのことで登ると落口のテラスであつた。この滝は二ピッチで二時間十五分を要してゐる。晝食をとり、だらだらの登りを二ピッチ右へ曲り込みながら進み、二米と大米程度の滝を乗越すと異く湿つた一五米程の滝があつた。B・Cからみるとだらだらの登りの中途あたり迄が見えるだけであつ

て、この滝あたりから日光が非常に乏しくなり、ルンゼの様相は一とさらに険悪に感ぜられる。滝底チムニーはチョックストーンのため登れない。第三登の関学パーティが前中ビヴアークしたのはこのチムニーの中らしい。右側の岩を直登し、打込まれてある二本のハーケンを利用して左へトラヴアース、岩を抱くようにしてチョックストーンの上に出た。滝の落口はガレが一杯詰ってゐて、人が踏むのは勿論、ザイルを少し動かしても物凄い落石が起る。最後の五米程の滝は発見した三本のピトンを利用してチムニーを簡単に登り切った。この滝の上正面及び左側は垂直の脆い岩壁で登れないので、右上へのバンドをトラヴアースしニヒッケで直接尾根のブッシュに入った。すぐ眼の下に直接尾根支稜のピークが見える。ピーク横テラスから左側のルンゼに下りてこれをぐんぐん登り北捨沒上へ直一文字に駆上った。

ピークリッヂ

七月二二日（晴時々ガス）　パーティ　大村・宮本

B・C出発（五・三〇）広い雪渓をつめて、P_1・P_2間の雪渓に取付く（六・〇〇―六・一〇）その雪渓をつめ雪渓上部の砂まじ



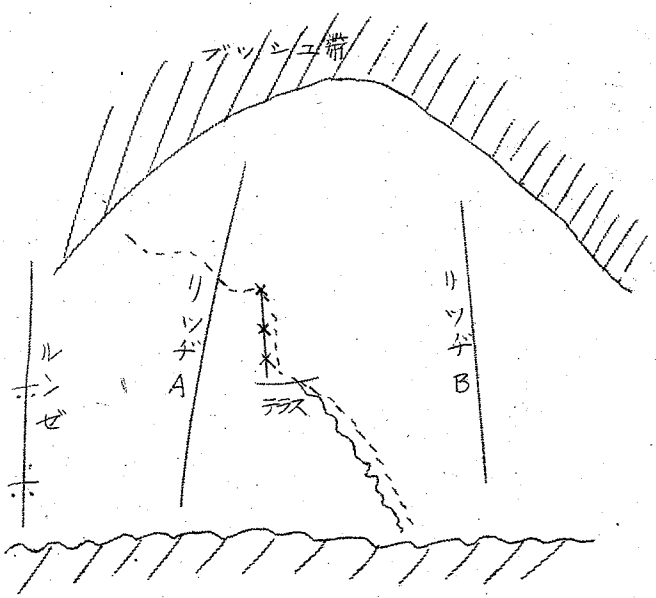
りの岩の斜面を左へ取りつきP_1リッヂのブッシュの中に飛びこむ。しばらく左へトラバースして扇形残雪下のルンゼ途中のテラスに達す（七・〇〇）これより藪混りの草付を少し登り再びP_1リッヂのブッシュ中に入りルンゼの滝を左に見つつ這松の中をこぎ扇形残雪に到る（七・四〇）

扇形残雪上部にてしばらくルート偵察後リッヂA、リッヂBの中央少し右寄の所に取付く（アンザイレン、地下足袋に代へる）階段状の岩場を登り楽にテラスに至る。この頃よりガスの去来がはげしく見通しがきかず前途に不安を感ぜしめる。この

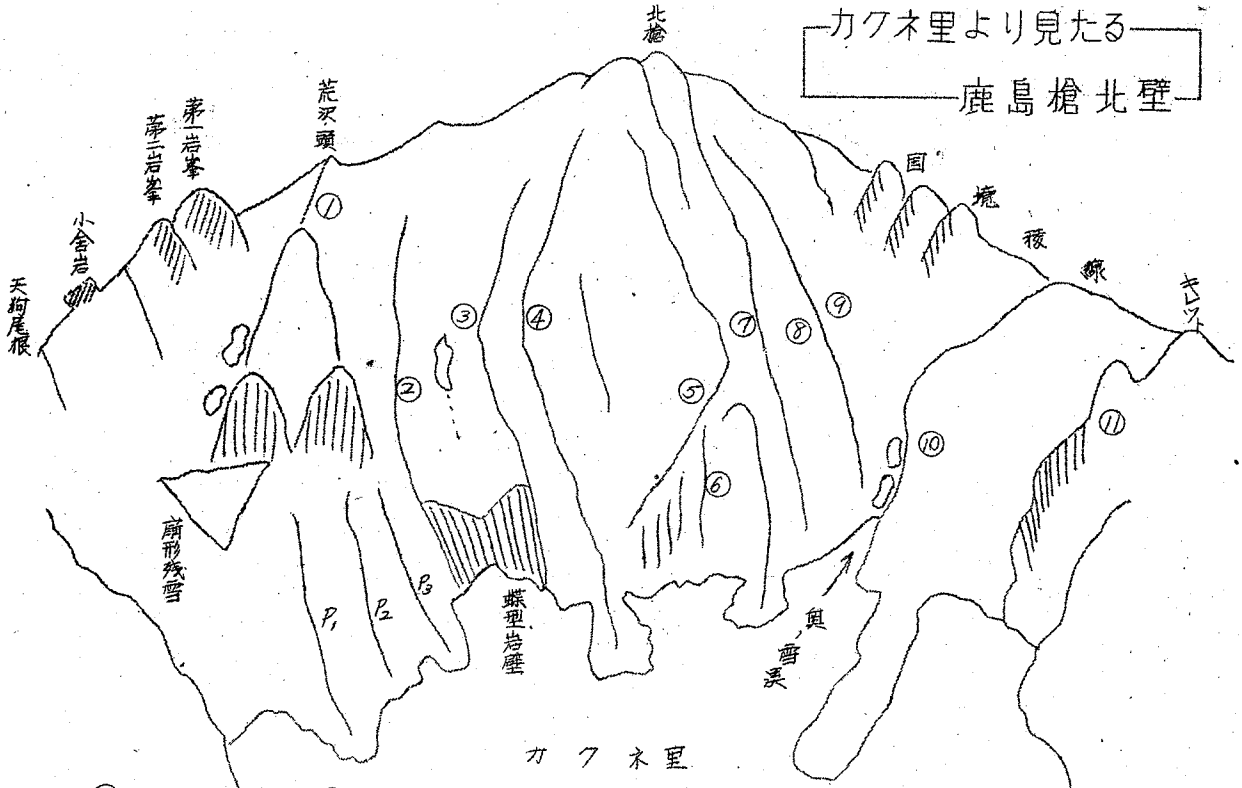
テラスの上はかなり急な岩で真中に一本リスが通つている。テラスから手のとゞく所にセルフビレー用のピトンを打ちて登らんと試みたがケシ登つて二本目のピトンを打つて立往生少々オーバーハング目の岩にはじまれたのである。仕方なくトップを交替、然し又不成功、幾度か交替してようやく3本目のピトンを打つことに成功、これを手がかりに岩をだく様にしてリッヂAの上に出る。リユックを釣上げる。この高さわずかに十米足らずだが、可成の時間を要した。こゝより岩のバンドを左へ上り系味にトラバースしてリッヂAを越え扇形残雪上部のルンゼ側に出る。この所から見るとルンゼの岩壁が切立つて居り登攀は不可能若しくは相当の困難な模様である。

更に大きな岩の積み重なつた斜面を四〇米ザイル一杯に登りブッシユ帯に入る。下向きの這松が思ひの外密生して非常に厄介を要する。ようやくにしてピーク前につく。このあたりは左側は草のわずかに付いた急な傾斜で登攀はかなり不安定な状態で、P残上はリッヂから数米の下で這松が密生している。ピーク西面リッヂの登攀は、さして困難ではなさそうであるがガラガラに風化して居り不安に思へたので敬遠、左側斜面をトラバースしてピークの上に出る。後は難なく荒沢の頭より頂上に至る。（三、三〇）

（大村記）



扇形残雪上部


カクネ里より見たる
鹿島槍北壁
北槍
荒沢頭
第一岩峯
第二岩峯
小舎岩
天狗尾根
廣形残雪
蝶型岩壁
β1
β2
β3
貝
雪渓
固
塊
稜
線
キレット
カクネ里
① ピークリッジ
② 蝶型岩壁 左尾根
③ 蝶型岩壁 右尾根
④ 主稜
⑤ 正面尾根
⑥ 中央ルンゼ
⑦ 直梅尾根
⑧ 右リッジ
⑨ 右ルンゼ
⑩ 河窟尾根
⑪ キレット尾根

一九五二年冬山合宿

山岳部といふ物は、本来山に登り、且つ登ろうとする人々の集りである限り、もつともつと自由を呼吸した〃我〃の登山こそ見られるべき筈なのだ。こうした登山に於ける真の個人性がによきによき確立してゐる様な山岳団体こそ、より高度な営みを為し得る団体であると私は考へる。この考へと、冬山合宿の具体的問題処理――即ち正月を含んだ日数の取方とか小人数での冬山訓練――毎冬合宿に問題になるこれらの解決と一緒になり、主目標を春山に置いた現在、この冬山こそ、自由に分散して、能率的なより好きしい冬山合宿を展開しようとした。

即ち、

第一パーティ　聖赤石方面
第二パーティ　木曽駒
第三パーティ　大沢方面（春山にそなへて）
第四パーティ　スキー合宿

の四パーティに分け、尚その他先輩のみによる冬富士登頂が行れた。

これらの山行自体は小規模ではあるが、こうした一回の合宿でさへ、今後の部の姿に前述の如き意味での前進が必ず見られるものと確信してゐる。夏山では余り問題にならないが、冬山での小パーティの動きの中こそ真の意味での個人の実力がためされ、且つのばされるのだと思ふ。私は報告会で耳を傾けながら、私を含めた阪大山岳部現段の実力がどの辺にあるのかを明かに認める事が出来た。決して思い上つてはならない。何はともあれ記録等問題外の極めて有意義な冬山合宿であつた。

冬の聖岳

尾茂敏之

〃南アルプス特有の味〃とよく言はれるのだが、それは雄壮的乃至純感覚的のものだけではなくして行動としての登山自体の中に独特の〃匂ひ〃を漂はせる。季節をかへ、場所をかへ、ルートをかへて違つた〃匂ひ〃かぎたさに、我々は一次は上、一次の山は上など頭にえがくものなのだ。実際一昨年の北岳以来南アの匂は捨てまる事の出来ないものになつて了つた。しかし長々と刻み込まれた渓谷や、南特有の岩にへばりつけられ、三千米の稜線も簡単には取付けないのだが、遠山川からの聖岳方面こそ

冬でも軌道が利用出来此もなく容易なアプローチで来達は此処に着眼したのである。此処も夏季漸く一般化して来た程度で、麓の人々も冬の登山など夢想だにしないといふ程度である。だから小舎も冬山として何等の考慮もされてゐないものだ。私達はこのルートより稜線に上り南冬山の好天を利用し、能ふ限りの広範囲な三千米の稜線の行動を展開しようと企てた訳である。即ち蓋山川をソ行し大沢尾根より百間洞小舎に入り、其処をベースとして　聖、兎　赤石　出来れば荒川迄も足を延そうと考へた。これにはベース迄を如何にスムーズに行ふか――それは登路の地形と積雪に密接に関連し――而も広範囲の行動の展開――それは一に天候に左右され――の二つの要素に大別されるものなのである。

耶秋東君と二人で登路の大沢尾根と小舎その他の下調べに行つた。その時は薄く新雪を戴いた彼方の北岳に何那かの秋のビバークを思い出し乍ら大沢尾根より稜線に出　赤石　荒川　悪沢を経て　転付峠を越えて行つた。又一方雪積状況と、冬季天候は　文献を調べて計画の基準とした。

実際雪は予想通り少かつた。汽車を下りバス・軌道を利用しながら更や茶の色で表はされる晩秋の様な山々に向い乍ら、我我は〝いや冬山へ行のだ〟と強いて冬山を意識しなければならなかつた。暗い寒々とした蓋山川と彼方の白銀の鬼岳のスカッとした明さとの対称は　我々に変な錯覚を感じさせる。それでも大沢尾根に取付いた時　二～三寸の粉雪が全くの粉の感靴にけちらかされる姿に抑へ切れぬ喜びを感じた。しかし二五〇米も歩せばテツセルだ。一尺も二尺もある。思はず目当り良い所に腰を下したくなる。一休みしたとたん全くの静さに　脆ひ必まれる様になる。ぶるつと身のすくむ様な寒さに思はず腰を上げた。寒暖計は零下十三度。正にさびしさその物の中に撤底した〝静〟自体がにじみ出てゐるといふ南の冬山の姿なのだ。そこに秋山の感覚の見事な破壊がある。やつぱり冬山なのだ。覚えせしめる所に南々の南アたる所が――いや　山の山たる生々としたその巨大な生命の実感がうかがはれるのである。

記　録（一九五二年一二月）

（パーティ）　尾藤昭二（L）　田島凡（SL兼）　宮本貞雄
（食）木村　裕　　土屋　直

一二月二三日　大阪発

二四日（晴）　飯田線平岡下車――木沢村（一四・〇〇）村役場

観光課及び営林署に連絡する。

二五日（晴）　木沢村乗元（八・三〇）―軌道―大沢渡飯場（一〇・三〇～一二・〇〇）―荷上げ―唐松峠（一五・四〇～一六・二〇）―大沢渡

大沢尾根に取付いて初めて二～三寸の雪の上に出た。高度と共に雪は増さないが、陽の当らない森林帯中では凄い寒気と乾燥した空気が静寂その物の中に溶け込んでゐる。唐松峠（約二千米）で荷を置いた。雪も三寸程。

二六日（快晴　朝-1℃　百間洞夜-20℃）

大沢渡（七・〇〇）―唐松峠（一〇・〇〇 -10℃）―荷物デポ（一六・〇〇）―大沢岳肩（一七・五〇）―小舎（一九・四〇）

-10℃の寒気に追ひ立てられる様に峠から全荷を背負つた。一時間余登つた時、急に雪が増し、足が重くなつて初めて気付いた。一尺余の雪に愈々ラッセルが始り益々ピッチは遅くなつたが皆黙々と頑張つた。しかし、疲労と寒気が張り始めた時もう四時頃だつたがまだ雪の中にうごめいてゐた。而もこの先は細い尾根の這松の上に出なければならない事を知つた時とてもこの儘では駄目だと思つた。大渡岳岩壁がのしかゝる様に夕陽に大きく浮んでゐる。ともかく小舎に入らねばならないと考へ、ガタガタ震へ乍ら荷をデポして幾線へと急いだ。最後の岳樺をぬけてアイスベーンの急斜面を登り稜線に出た時は、大吋、もう陽は残影のみを残し、夕闇が辺りを包んでゐた。寒々とした間の海に聖、赤石が恐しい様に浮んでゐた。私達は吸ひ込まれる様に百間洞の彼方に下つて行つた。ラッセルこそ問題ではなかつたが道が分らない現在、疲れた体には、なんとかうまく小舎に出たいと眼を光らした。ふと気付くと其冷よく月光が青々と雪面を照してゐた。百間平のガレと、丸山とを結ぶ線上大渡岳から百間洞への小尾根の末端附近に小舎があるのだといふ永の事を思ひ出し下ら見当をつけて下るとやがて、ポンと小舎の前に出た時はさすがにうれしかつた。二尺余の雪の中にポツンと建つてゐた。七時四〇分-20℃の寒暖計を見て、身震ひしながらシュラーフに入つたのは、十時も過ぎてゐた。

二七日（晴後雪、-16℃朝）

小舎（九・〇〇）―デポ地（一〇・四〇）―小舎（一三・〇〇）

全荷小舎迄上る。

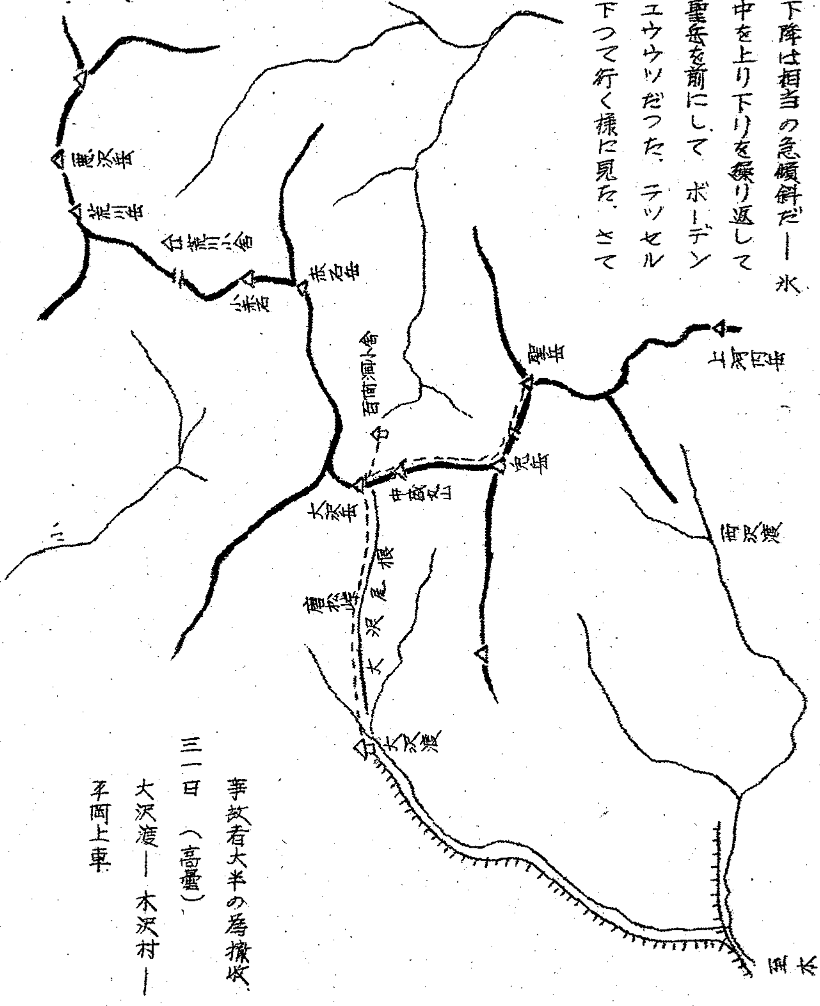
二八日（風雪　一日中-16℃）　停滞

二九日（快晴、朝-20℃）　聖岳アタック

小舎（六・〇〇）―丸山（八・〇〇）―兎岳（一〇・三〇～一一・〇〇）―聖岳（一二・三〇）―小舎（一七・三〇）

尾藤・宮本（聖岳）、　田島・木村（兎岳）　土屋（小舎）

昨日の雪もラッセルは大した事なくトレースをその侭稜線に出た　中盛丸山を越え―　その下降は相当の急傾斜だ―　氷堅雪　板状雪の落し穴の交錯の中を上り下りを繰り返して兎岳に立った　のしかゝる様な聖岳を前にして　ボーデンも見えないコル迄の下降は実際ユウウツだった　ラッセルこそ問題にならないが何処迄も下って行く様に見た　さて聖岳は右半は岩塵部で西沢に落ち込み　左半は雪の急斜面だ　私達はこの境目の部分を選び下ら一気に一時間で頂上に登り切った　快晴の眺望を恣にしながらも　寒さにすぐ下降に移らねばならなかった　兎　小兎と上り丸山の最後を登る時には疲れた体は自由にならなかった　登り切って下降一途になると足から力がぬけた様にころび下ら雪まみれになって　小舎に帰った



三〇日（晴　風）

小舎（一〇・三〇）―大沢渡（一七・三〇）

事故者大半の為撤収

三一日（高曇）

大沢渡―　木沢村―

平岡上車

冬季南アの積雪及び天候について

尾藤昭二

積雪期南アルプスの文献は非常に少く、而もその大半は、北沢峠を中心とした物に集りその他夜叉神峠三伏峠に僅か見られるに過ぎない積雪登山がスキー登山に始まつた点から誠に当然の事と言へるのだが、実際南アでは、スキーを使へるとなると北沢峠か三伏峠位の物で、而も冬では屢々雪が少な過ぎて使へない場合もある程なのだ。

さて私達が大沢尾根よりの聖岳に目標を置いた時、最も問題になつたのは登路の積雪状況であり、天候であつた。私は出来るだけの文献に当つて調べ、出来れば推計学的な取扱ひをやればと考へてゐたのだつたが、南アの南部の冬山となると文献的に更に少くとてもその様な取扱ひは出来ず結局、平均値的に推定したに過ぎなかつた。しかし、自分の文献上の推定と実際の経験とで可成はつきりした性格を持つた結論が得られた様に思ふので、それを述べ、今後の参考としたい。

一、積雪状況

此の問題は、その山行に於て余程雪に苦労した場合とか、或ひは特に積雪に留意した場合の外は余り記憶に残らない為一般に文献上にその記載は少く且つ曖昧なものである。勿論年により又同じく冬季と言つても日により積雪は可成の相異があるのは当然である。しかし、北アでも、六月とか十一月の山或ひは未知の冬山に行し際、その登路の積雪は言ふ迄もなく分らない位に可成の神経を使はねばならない。私はその為、南の冬山の文献を当れる限り調べてみた。勿論、聖岳の記録も大沢尾根のそれも見当らない。しかし南ア全般の記録より標高及び位置的関係より考へ合はすと、ある程度の推定を為す事が出来た訳である。勿論言ふ迄もない事だが森林限界の二七〇〇米迄の積雪状況であり、それ以上のラッセルの必要の無い所は問題にならない。だから森林限界内でも積雪一～二尺位から主として問題になる訳である。次に資料を並べてみると、

一九三〇、　伝付峠（二〇四〇）　約三尺

大井川（一二〇〇～一四〇〇）　例年なら二～三尺

一九三三、　夜叉神峠（一七七〇　　約二尺
鮎差（一一一〇〇）　　〃一.五尺
池山ツリ尾根（二〇〇〇）　　四尺
一九三四、北沢峠（二〇三二）　一七〇〇以上雪
広ヶ原（一七〇〇）　　約一尺
伝付峠（二〇四〇）　　二尺
大井川　　一尺
一九二七　三伏南沢（一五〇〇）　一尺足らず
三伏　峠（二五八〇）　六尺？
一九二八　北沢峠（二〇三二）　六尺
一九二九　夜叉神峠（一七七〇）　三尺
広ヶ原（一七〇〇）　二尺
大　樺（二四〇〇）　五尺
一九二五　北沢峠（二〇三〇）　四尺
一九五一　夜叉神峠（一七〇〇）　二尺

これらを見ると、積雪は明瞭に北部即ち北岳附近と塩見岳附近の中部とに分かれるであろう。而も一～二尺の積雪になるのは、北部では一五〇〇米、中部では二〇〇〇米と考へてもそれ程無理とは思へない。私は大沢尾根は南部に位するから決して中部の積雪よりは多くはなるまいと考へてゐたが実際二千米附近では二～三寸であり、二四〇〇米余から急に増し、一.五尺程も積つてゐた。勿論広い南アを北部、中部、南部と大別してその各々に対して、他の種々な要素（地形、その年の一般季節測定場并又尾根と谷etc.）を無視しての概数ではあるが一般的な基ソ概念としてこの数字を利用する事は、決して無意味とは考へない。要するに一～二尺の雪は北部では、一五〇〇米、中部では二千米、南部では二四〇〇米と結論出来よう。

二、冬季天候

〃南アの冬の天気はいい〃と言はれるがどの程度に、又どの様に良いのかとなると誰も明瞭に言べなくなる。私は天候には必ず性格と言へる様な癖がある様に考へてゐたが、実際文献より書出し、表にしてみると個々に見てゐたのと全く異った見方があるのに気付いた。

これらの表をぢつと見つめ、晴天には赤線を凡雪には青線をアンダーラインして、遠くから眼を細めて見る時、連続した赤線が屢々浮び上つてゐるのに気付くであらう。即ち特徴として

イ　一〇日前後の中、その約半数の晴天（少くとも行動日）が

	24	25	26	27	28	29	30	31	1月 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1925 駒・仙丈 (慶応)											晴	晴	風雪	風雪	曇一雪	晴一雪	雪	雪一晴	晴	晴
1927 北岳 (慶応)						曇一雪	風雪	晴	晴	風雪	風雪	晴	曇	曇晴	晴	晴	晴	雨		
1928 三伏 (享大)								10 晴	11 曇	12 晴	13 晴	14 晴	15 曇	16 風雪	17 晴	18 雪				
1928 塩見岳 (慶応)							曇	晴	晴一雪	風雪	雪	晴	晴	晴	雪					
1930 鳳凰 (慶応)							曇	雨	晴	晴一曇	曇晴	晴一曇								
1930 北岳							雨一晴	雨一晴	晴	晴一曇	晴	曇	晴一曇	曇一晴	晴	雪	晴	晴	晴一曇	晴
1931 雲沢岳 (立教)						曇	晴	晴	晴一雪	雪	晴	晴								
1933 北岳 (立教)							雪	晴	晴	晴一雪	晴	晴	晴一雨							
1934 聖岳					晴一雪	晴一雪	曇一雪	雪	雪	晴一雪	雪									
1934 仙丈北岳							晴	曇一雪	雪	雪	雪	曇一雪	晴	晴	22 曇一雪	23 曇一雪	24 晴	25 曇	26 晴一雪	27 晴
1948 北岳 (法政)			12月	12 曇一雪	13 雨晴	14 曇一雪	15 雪	16 晴	17 晴	18 晴	19 風雪	20 曇								
1951 北岳 (阪大)			雨	晴	晴	晴	晴	雨	晴	晴	雪一曇	晴	晴	雪	雪	晴	晴			
1952 聖岳 (阪大)	曇	晴	快晴	晴一雪	風雪	快晴	晴	高曇												

得られる割合になる。

(二) 連続晴天（二日～三日）が各山行に於て必ず少くとも一回は得られる。

(三) 降雪刀至凡雪は二日～三日以上続く事はなく概して連続凡雪の後に連続晴天が来てゐる場合が多い。

(四) 不安定な天候は、一般に停留し易い。

と結論出来よう。その他北部、中部、南部及び東側、西側等の地域差は余り見られない様である。又恵まれて晴天が四日も六日も連続する事が時例的に得られるといふ事は誠に心強い限りである。

これらの事が我々の山行にもあてはまつた事を附言して居く。

参考文献

立教報告 3、4、5、6の各号

登高行Ⅲ、Ⅳの各号　　山一九一号、岳人

リユックサック 6号　　山想 Ⅴ Ⅵ号

阪大時報 4号

春山合宿 後立逆縦走

長谷部 乙

まへがき

積雪期後立縦走は、既に戦前立教大が冬季二度試みて惜しくも失敗せられ、その後昭和十八年春に東京大の井上氏等により、白馬より針木に到る正縦走が成功せられた。私達は数年間主力を後立山に注ぎ針木より白馬に到る逆縦走を目標にして来たが殊に一九五一年春の逆縦走失敗以来は、部員全体のそれへの情熱は固かつた。

縦走に際しては、縦走共問題にせられ、且つ常識的に考へられる八峯キレットと不帰は、一九五〇・五二年の春山で我々も一応積雪期の問題を解決した訳なのであるが、一般に看過されてゐる針木・冷沢の問題の重要性を推察した私達は、これを加へた三点を中心としてサポート隊の配置を考へた。一方縦走隊は、サポート隊の進展に歩を合して、純アタック形式に各区間前進しようとするもので、従つてその精神的、肉体的、負担を能ふ

限り除き、必ず縦走完遂し得る十分な余力を縦走隊に残す事が計画の骨子であつた。従つてサポート隊の負担は可成重くなる訳であるが、その為にサポート隊を出来るだけ大部隊にし、その大半を全く荷上げのみに使用して稜線近のボッカを円滑、且つ容易にし、更にボッカ進展に伴ひ、次々と下山せしめて縦走隊と縮少したサポート隊が稜線上で長期間堪へ得る様に計画した訳である。勿論必要の場合はサポート隊全員が荷物を各小舎に残して下山し縦走隊独力で行ふ事を考に入れてのすべてであつた。此のサポート作戦には稜線近の登路として極めて容易にして便利良きルートが不可欠の條件であつた。それで一方を八方尾根他方は冬山デイサツ以来一応新越尾根となつた訳である。

尚先述の針木・冷岡はそれ自体としての問題と言ふよりも、それの全縦走に於けるウエイトが極めて重且大と考へたのである。私達は偵察隊を送り、大沢小舎から新越乗越への容易な登路を発見し、それを解決出来た事は全計画をスムーズに進める大な誘因であつた。

計画

縦走隊　川島　勇(L)　住吉仙也、
サポートA隊　田島　凡(L)　山本光二(食)　大村一生(会)
突戸　元、　豊沢　忍、　本中　勝
サポートB隊　尾藤昭二(CL)　坪井圭之助　東雍(食)
近　瑋三、　小沢逞夫　土屋直　立花直治
木村　裕

一、縦走隊

I. 大沢小舎―針木岳―新越乗越
II. 新越乗越―冷小舎
III. 冷小舎―キレット小舎
IV. キレット小舎―唐松小舎
V. 唐松小舎―白馬岳―細野

二、サポート隊

A. 大沢小舎をベースとし、新越乗越に雪洞を造め冷小舎迄サポートし、鹿島槍釣尾根迄縦走隊に同行する。
B. 八方尾根より稜線に上り、五龍を越えてキレットをサポートし、引返して唐松を越えて不帰をサポートする。

三、連絡

両サポート隊の境点を鹿島槍釣尾根とし、標識を立てる事

尚　その他あらゆる場合を想定してその連絡を決めた。

四、偵　察　隊

偵察隊を全計画行動開始前に先発せしめ　新越東越への登路及び南沢を偵察せしむ。

行　動　記　録

三月二三日（小雨）

縱走隊・A隊・・大町（一一・三〇）―寄沢（一三・三〇）―黒沢営林署小舎（一四・三〇）

B隊・・細野（一四・〇〇）―黒菱小舎（一七・〇〇）

昨二二日夜全員大阪を出発し　大町では偵察に加つた縱走隊と最後の打合せを行ひ隊編成を行つて　お互の健斗を祈りつゝ分れた。

午后小雨の中を縱走隊・A隊はバス・トラックを利用して寄沢附近迄入り　容易に黒沢の営林署小舎迄荷上げ出来た　一方B隊は久保先輩にも加つて頂いて全員細野から黒菱小舎に入つた。

二四日（晴）

縱走隊・A隊・・黒沢（九・〇〇）―大沢小舎（一五・三〇）

B隊・・・黒菱（七・〇〇）―唐松小舎（一三・三〇）

縱走隊・A隊は途中新越尾根末端部に荷をデポし　一気に大沢小舎に入つた。B隊は尾藤・近の二名のみ唐松小舎に入り小沢・土屋は唐松小舎迄荷上げ他は上樺に荷をデポして黒菱小舎に下つた。午后尾藤・近は再び上樺の荷の一部を小舎に荷上げした。久保OB下山して頂いた。

二五日（曇後風雪麓は雨となる）

A隊は雨の為新越尾根下部に荷上げて引返す。

B隊坪井等六名は早朝黒菱を出発　途中風雪化してきたので小沢・木村・立花の三名を上ノ樺に荷をデポせしめて計画通り下山せしめ坪井・東・土屋の三名は唐松小舎に入つた。午后凡雪中を尾藤・坪井隆　牛首偵察　東・近・土屋はデポした荷を全部小舎に運び入れた。稜線迄の荷上げはスムーズに進み　風雪の音を聞きながら明日は休養と皆の顔がほころんでるた。

二六日（風雪）　A・B隊共停滞

二七日（稜線は風雪・麓はガス後晴）

A隊　大沢（一〇・〇〇）―国境稜線（一五・三〇）―一六・二〇）

―大沢（一八・三〇）

天候を誤り出発はおくれたが　午后は完全に晴れ　稜線の雪洞予定地迄荷上げ完了出来　愈々次の晴天には縱走隊出発といふ段取に至つた。

B隊　停滞

二八日（高曇）

縦走隊　大沢（四・三〇）―針木峠（七・〇〇～八・〇〇）―針木岳（一〇・〇〇）―スベリ岳（一一・四〇）―赤沢岳（一四・三〇）―鳴沢岳（一六・〇〇）―新越雪洞（一七・三〇）

暗沢の準備により縦走隊は、満天の星空を仰ぎつゝ小舎を出た。虔味のある竜川本谷をチラチラニケの電灯が進む。ワカンでのラッセルも、もどかしい様だが、黙々と峠に向つて直登。五時電灯を消す。最右の雪庇を右に巻いて峠に立つた。朝食後間もなく空模様がおかしくなつてきたのですぐ出発した。ボコボコもぐり下る稜線を進み、十時縦走第一峯の針木岳頂上を踏んだ。白馬は遥か彼方に顔をのぞかせてゐるのみだ。下降はアンザイレンして慎重に下つた。堅雪にゆるんだ新雪のあるのは危険極りない。更にスベリへは雪と岩のナイクリッヂや、急な雪面を上り下りしながらそれを越える。次は夏道を利用して漸く赤沢岳に着いた。ほつと一息入れてゐた時、新越尾根上部を進む点々としたサポート隊を見付けた。如何にも頼もしい姿に見える。

更に同様な上り下りを繰り返して鳴沢岳を越えた。その下降の急雪面も非常な注意を要したが、愈々雪洞も間近くなつてきた新越乗越附近は、ラッセルがひどくおあつけされた犬の様に眼ばかり先に進む。五時半漸く迎へられて雪洞に入つた。

A隊　大沢（九・〇〇）―雪洞（一四・三〇）

夜中から炊事して縦走隊を送り出した暗沢以外の五名は、残余の荷を持つて出発。国境稜線到着後は、直ちに雪洞建設五時半縦走隊を迎へ入れた。折から降り出した雪の中を田島・本中は大沢小舎に下つて行つた。

B隊　唐松小舎（八・三〇）―白岳小舎（一二・三〇）

高曇で風もある変な天気であつたが、B隊の五名も出発し、半音もアンザイレンして稜線通り下り晝過ぎ白岳小舎に着いた。近・土屋を往路を帰りて直ちに下山せしめ、尾藤・坪井、東の三名は五龍頂上迄荷上げし　鵬翔会の雪洞に入れぶらくと下る頃より雪が降り出した。

二九日（風雪）　停滞

三〇日（風雪）　停滞

三一日（ガス・強風）　停滞

薄日がさす様でガスも間もなく晴れる様に思はれたのでA隊は出掛けたがやはり引返し、B隊も五龍頂上迄行き、荷作りし

て待つたが遂に引返した。夜さえ渡つた月光は実に物凄く山々を照し出してゐた。

四月一日（快晴）

縦走隊・A隊・新蔵雪洞（八・三〇）— 種池（一一・三〇〜一二・五〇）

—冷小舎（一六・〇〇）

雪洞を撤收して、岩小舎沢岳のラッセルをすまして種池へ着いた頃は風もなく、ポカポカと日が照り、皆車坐に坐り込んで茶をわかしたりして晝食を攝つた。笠岳を過ぎて冷小舎を目の前にする頃より再びラッセルに悩された。冷小舎は屋根の石を出してゐるのみで堀り出しに一時間半要したが奥の部屋は雪もなく、少し手入すると気持良い小舎になつた。

B隊：白岳小舎（九・〇〇）— 五龍岳（一〇・〇〇〜一〇・三〇）

—キレット小舎（一九・三〇）

五龍頂上で荷作りして出発した時八貫の荷があつた。五龍の下降は、アンザイレン四〇米四ピッチで急雪面を直降少し右へトラバースしてコルに立つた。後は岩をよぢ雪面をトラバースし、夏道に沿つたりして上り下りを繰り返したが、重荷の我々のピッチはおそく、夕闇迫る七時半漸く小舎に着いた。愈々計画も本道に入つた感がある。

二日（晴後ガス）

縦走隊・A隊：冷小舎（九・〇〇）— 南槍頂上（一一・三〇〜一二・三〇）A隊のみ冷小舎（一三・三〇）

B隊：キレット小舎（八・三〇）— 釣尾根（一一・〇〇）— 南槍頂上（一一・三〇〜一二・三〇）縦走隊と共にキレット小舎（一四・三〇）

何れの隊も今日こそ会へる様な気がしてゐた。縦走隊・A隊は冷を出て、南槍頂上に向ふ頃よりガスが出来し、頂上に立つた時には、釣尾根の方向さへ分らなかつた。何気なく「ヤッホー」と呼んだ時、丁度釣尾根から南槍に向つてゐた、B隊には聞き慣れた声だつた。俄然B隊のピッチは上りヤッホーを呼び下ら一歩一歩ステップを切りながら頂上へ、遂に一一時半頂上で喜びの握手を交した。車坐になつて晝食、相互の苦労を語り合ひ下らも、誰の眼にも明日（の喜びが輝いてゐた。記念写真もすんで、縦走隊はB隊に導れてキレットへ、A隊はそれを見送り下ら彼等が一人づゝガスの中に消えて行き、声も届かぬ様になると急に寂の破けた様な寂寞感に包まれ、默々として冷小舎に引上げた。さてキレットは我々の予想より遥かに良く、小舎から小八迄は、北穂会のトレースがあり、夏の針金が使用出来、又大八はその頭の岩角にザイルを巻き京大のピトンに確保

して四〇米のザイルを下げ、キレットボーデンより黒部側を巻く所は、一部針金も出て居り、更に一〇米ザイルを固定して簡単に通過した。又釣尾根よりキレット（の下降はガスに包まれてゐた者でもあるが、トレースがなかつたら仲々容易でないと思はれた。

三日（曇後雪）

A隊：冷小舎（八・〇〇）―新越乗越（一四・〇〇）―大沢小舎（一八・四〇）

不安定な天気で夜明け前から考へてゐたがラッセルとシュープールの事を考へ遂に冷小舎を撤收何日振りかで大沢小舎に帰つた。

B隊・縦走隊：休養停滞

四日（風雪）

A隊　大沢小舎撤收下山

B隊　縦走隊停滞

五日（大休晴）

縦走隊・B隊：キレット小舎（一一・〇〇）―白岳小舎（一五・〇〇～一六・〇〇）―唐松小舎（一七・四〇）

天候を見ながら出発してゐたが遂に出発　身も心も軽い五人の足取も早く四時前で、白岳小舎に一時前四十分で、唐松小舎に入つた。素晴しい御馳走をして明日を祝福し、サポート隊は夜おそく迄明朝の準備を行つた。

六日（ガス後風雪）

縦走隊　唐松小舎（七・〇〇）―不帰二峯（九・三〇）―鑓ヶ岳（一三・三〇）―雪庇下ビバーク（一六・三〇）

B隊　不帰二峯より引返し―唐松小舎（一〇・二〇～一一・三〇）―黒菱―細野（一五・〇〇）

朝から歓に雲がかゝり風もあつて思はしくない天気だつたが出発は誰の心にも固く決つてゐた。縦走隊B隊は七時出発唐松岳を越え、三峯の黒部側を巻き二峯の下降は針金を利用出来たが更に末端に三〇米ザイルを固定して全員下つた。エボシ岩手前の岩頭に四〇米ザイルを固定し、懸垂で下り、尾根は更にエボシ岩上部に上り、同ザイルで縦走隊のエボシ岩信州側トラバースを確保、此処で縦走隊はB隊と分れを告げた。時刻は九時半。祈から雪がちらちら降り始めてゐた。

不帰を越え天狗に上つた頃より本格的な風雪化し、夏道が僅に浮き出して見えるのを頼りに漸く天狗池に着いた。それからは磁石と地図とカンを頼りに二時前近くも掛つて鑓岳登路の頁

道に出り着いた。兎に角出来る限り白馬の小舎迄行かうと鑓岳を越える迄はよかつたが、更に村子に向ふ稜線が分らず一時黒部側への尾根を下つたり又雪の斜面が全面判別出来なかつたりして、三時頃近くも行き悪したが、遂に断念ビバークに決した。少し逆戻りして鑓岳を下り切つたコルの雪庇の下を少しならして、ツエルトをかぶりもぐり込んだ。夜になつて降雪が烈しくなり両側及び正面から圧迫され遂に二人共体を接して身動きも出来ぬ迄になつた。それでも少し眠れた。

一方B隊は縦走隊を案じ乍ら、凡雪中を唐松小舎を撤收、八方尾根を下り細野に下山した。夕方坪井は細野に居た大村と雨の中を猿倉の近く迄迎へに行つたが、縦走隊は下りて来ず、明日の天気を気にし乍ら夜中細野に帰つた。

七日（快晴）

縦走隊　ビバーク地（六・四五）――白馬頂上（九・三〇）――白馬尻（一〇・四〇～一二・〇〇）――細野

日出前より準備を始めてゐたが快晴の朝の寒気は烈しく、出発迄二時間も要した。晴れた稜線では白馬迄の連路がその終日の前に置かれ、昨日探した尾根も今朝はアイゼンも快く効く間に過ぎて白馬頂上に縦走最後の足跡をしるした。一気に大雪渓を下り、雪庇で長い間休み後はもう下界の道だとボコボコもぐり乍ら猿倉を過ぎて下つてゆくと、北股取入口少し上手で屋兼坪井、東、大村に迎へられ無事成功の握手を交した。どつかと雪の上に下した腰は、もう容易に上らなかつた。ポカポカと春の陽を浴びながら川の水音に無精に耳を立てた。細野に帰つた時はもう五時も過ぎてゐた。

新越尾根について

新越尾根（仮称）とは、大沢小舎の少し下手から乗越の岩小舎沢岳寄りの所に上る尾根である。冬季の偵察により これを認め、今回春山行動前始前に偵察隊を出して、これが登路として容易な尾根である事が分つた。

偵察隊は大島輝光OB（L）、久保三朗OB、川島勇、庄吉仙也、田島凡のメンバーで、蓮尾根及び蒲沢偵察の目的で三月一六日大阪を発ち、一七、一八日で大沢小舎に入り、一九日快晴を利用してこの尾根を登り更に岩小舎沢岳を越えて種池、蒲沢を経て下降し一気に偵察を完了した。

さて此の尾根についてであるが冬期にして殆ど耳にした事がないので、その詳細を説明しよう。

先づ取付は尾根末端から行ふのが最も簡単である。大沢小舎

から本谷を少し下ると新越沢出合に出、更に行くと本谷が稍左に曲り、次に右に曲らうとする所の附近が末端部で重畳側稍上手の河岸段丘に、大きな数本の木が見えるのが良い目標である。この取付点から　この尾根をぐんぐん登ればよいだけで大した所もない。大部分ブナ、モミ更にカンバに覆れて居り平均傾斜も大した事もなく、大沢小舎から大時間足らずで登り切る事が出来る。

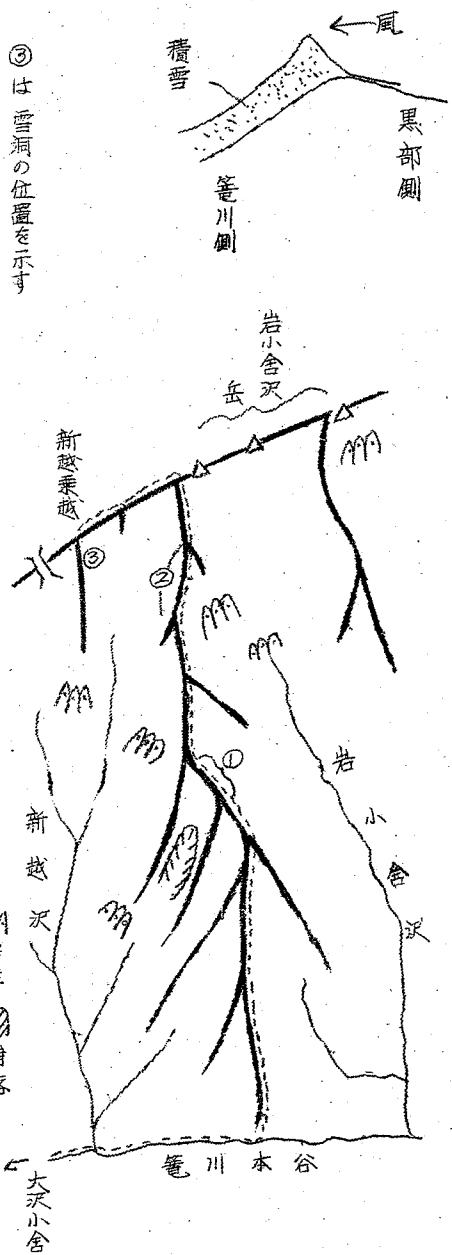
二、三注意を附加すると　枝尾根が多いから下降の際間違はない様にし　特に標識等をつけた方が良いだらう。又ルート図の①②の部分は注意すべきで特に雪の状態の悪い時は警戒しなければならない。

更にジャンクションでは雪庇といふより左図の如く雪が盛り上つた程度で、簡単に国境稜線に出る事が出来る。

あとがき

一、稜線の雪の状態は一般的に良好で特に不帰キレットでは可成針金を使用出来た。その他種池附近のラッセル及び鳴沢針木間が案外悪い事には留意すべき事である。

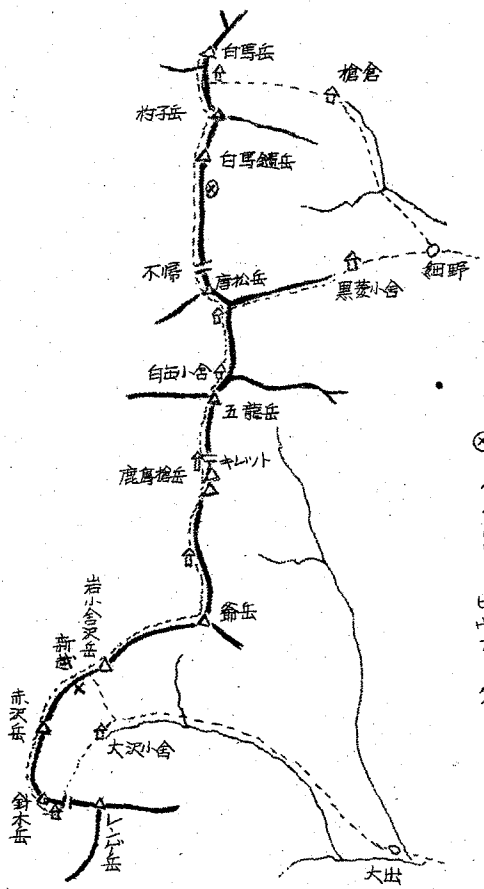
二、小舎について特に記す事といへば　針木小舎は雪が入り使へないのは例年の事であり又冷小舎は今春は屋根の2/3のみ出



③は雪洞の位置を示す

てゐたのであるが理つてゐる場合も十分考へられるから予め位置を確めておく必要がある。

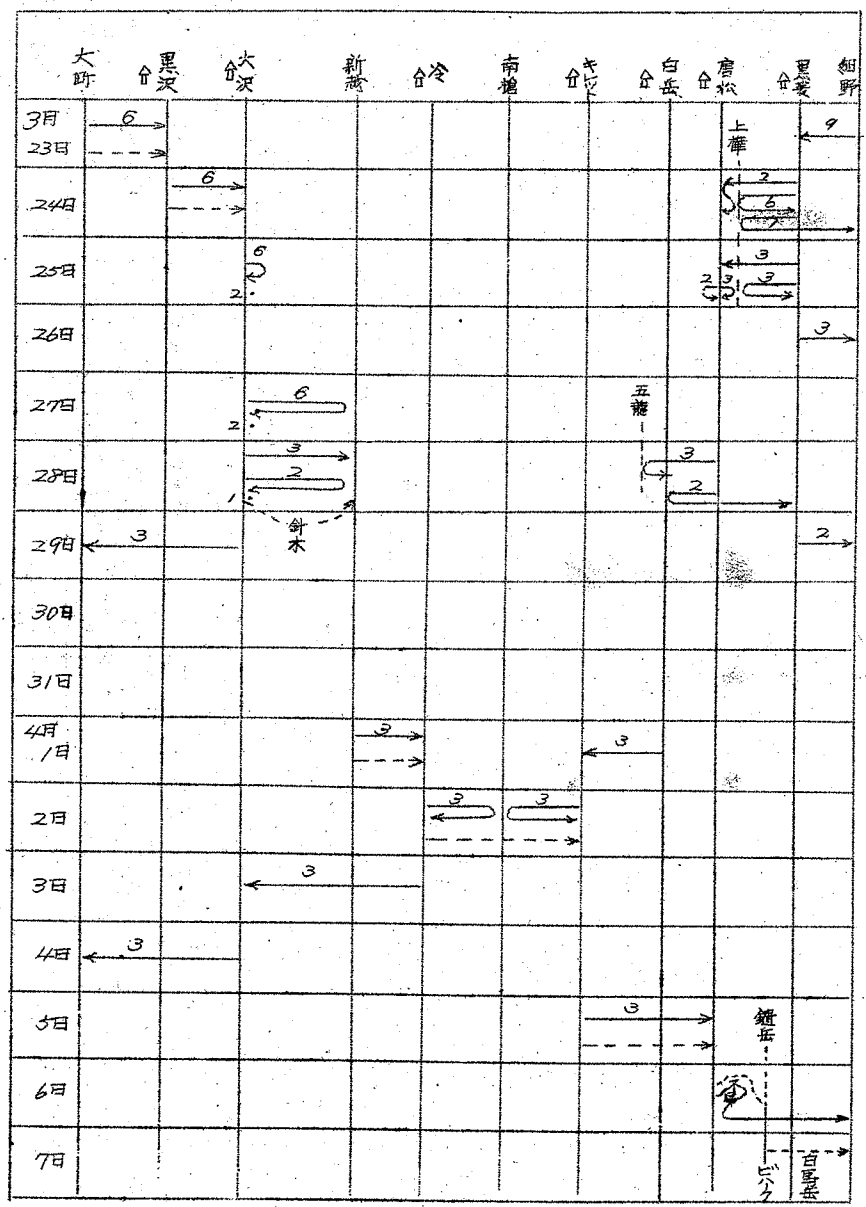
三、全行動をふり返つて見る時、何といつても前始に先立つ新越尾根の発見とサポート隊に於ける運搬特に稜線近の荷上げを一気に進める事が出来た点などが成功の一番大きな要素であつただらう。しかしこの計画がこうした縦走に於ける最も良い物とは決して言へない。私は登山に対するアイロソフイから高一層好ましく且つ高度な計画――縦走計画――を考へながら筆を擱く。



× 地点……雪洞設営

⊗ 〃〃……ビヴァーク

行動表


縦走隊 2名
サポート隊 数字ハ員数
大跡
黒沢
大沢
新蔵
冷
南槍
キレット
白岳
唐松
黒菱
細野
3月23日
24日
25日
26日
27日
28日
29日
30日
31日
4月1日
2日
3日
4日
5日
6日
7日
上薬
五龍
針木
鑓岳
ビバク
白馬岳

天候について

春期の後立山に於ては晴天（峯ろ行動日と言ふべきだらうか）は一般に三日に一日の割合で得られるといふのが誰しも一応考へる数字ではある。しかしそれは、数度の経験（あらゆる意味を含んで）から漠然と感じられるものであつて決してその経験を整理し推論された物ではない。だからと言つてそれが突飛な数字だといふ訳ではない。今次の春山に限らず何れの登山に於ても十分なる確実性の中に能率的な機動性を併せ備へねばならない事はその大部分が天候と食料計画のアンバランスによるのであるから、私は今一層のそれに対する確信を得なければならない考へた。そしてその天候の〝癖〟を知らうとした。しかしメトーデに対する熟慮、忍耐の不足と問題の門口の過大とにより大した意味も考へられなかつたが、集めたデーターによる天候表を記し、読者諸君が更に多くのデーターを並べて、自由に推論される様希望する。

更に附言するなら一九四九年の春山は春山として最も天候の悪い時の標準と考へてよいと思ふ。又毎年の同一時期に於ける同一地域の天候からその週期性を見るよりも同年の十日乃至二週間前からの天候を調べてその週期から次の天候を推測する

	1933	1949	1950	1951	1952	1953
4月1日	晴	放風	晴曇			快晴
2	快晴	晴	烈風		雪	晴放
31	曇	晴曇	曇		晴曇	放風
30	晴	ガス	雨	曇	放晴	風雪
29	快晴	晴	晴	曇雪	曇放	風雪
28	放風	曇		雪	放晴	高曇
27	雪	ガス		雪	晴雪	風雪
26	風雪	風雪		曇	晴	風雪
25	曇雪	風雪		晴	風雪	放風雪
24	強風	風雪		晴	晴雪	晴風
23	強風	風雪		雪雪	曇雪	雨
22日	晴	風雪		晴雪	晴	
3月2日	強風	雪晴		晴	晴	

方が正しいと言ふ事を気象台の方から聞いたので序に述べておく。

これらは何れも後立山に於ける春季の天候である　最下段に今回の記録を加へた。

引用文献

立教報告V.　岳人

阪大時報I. 2. 3. 4号

（尾藤記）

春山食糧報告

今まで私達の積雪期に於ける行動で食糧の不足を来した事は殆んどない。これは無難なことには違ひない。だが一方に於て多くの余剰食糧を残し重い目をして担ひ下すことが非常に多いのは果して合理的な食糧計画がなされてゐると云ひ得るだらうか。今度の後立山全縦走にはこの点を何とか解決しようとして停滞日数の予定にはかなり神経を使つた。数年来の同じ時期に於ける天候の統計をとりこの方面の予想に行動場所の状態から来る要素を加へて大沢パーティは八日の行動日に八日の停滞日をキレット・パーティは五日の行動日（但し唐松以南のみ）に九日の停滞日を予定したが　実際には大沢パーティは五日キレット・パーティは七日しか停滞しなかつた。したがつてかなりの量の余剰食糧を生じた。斯く我々の能ふ限りの研究の後に尚余剰食糧の出た場合我々のとつた処置――それはあらかじめ決定されてゐたが――はこれを抛棄することであつた。余剰食糧を抛棄することは合理的な事と思ふが今回の山行程度のもので尚かくする必要があるか　価値があるか　又我々にそうしなければならない程余力がなかつたかは大いに問題とされるだろう。

主食は朝　餅一合　食パン半斤　揚パン一ケ　晩　米二合を予定したが荷上げを楽にする為米、餅を初期に消費し　後期荷に大沢パーティでは殆んど揚パンのみを三食に亘つて用ひた結果　昨年春以来　美食と考へて来た揚げパンが　全員の嫌悪の的となつた。この事は主食には変化を持たせなければならぬといふ教訓を今一度我々に与へると共に　米に対して我々の持つ魔力的といつていい程の旨好を再認識させた。

副食は昨年春　大略の基準量を算出することを得た。味噌汁カレー、スープの三種の献立を踏襲した結果　基準量は味噌に就いては多きに過ぎカレー粉に就いては少きに過ぎた事を知り得た。更にガソリンは一日一人　一・三合を予定したが大体間違はなかつた様である。

総じて今回の山行は計画を成功させる為、食糧は出来るだけ切り詰めてボッカを容易にすることに意が用ひられそれと共に我々の直面する経済事情から来る止むを得ない食糧（特に寒冷方面の）の節約等が食糧計画の後始末によつて得られるデーターを殆んど提供してくれなかつた。この事は今回の山行が新人訓練を無視した点と共に反省の焦点であり、今後の行き方に暗示を投げかける大きな要素であらう。

（山本記）

一九五三年度春山会計報告

收入の部

部員	三六・五五〇円	
先輩寄附	四・五〇〇円	
計	四一・〇五〇円	

支出の部

食糧	二三・一三五・円
カンパン	一・六五〇円
パン	四・五〇〇円
米	四八四〇円
モチ	二三四〇円
ソノ他	九・七一五円
小屋代	一二・八〇〇円
ガソリン	一・四五〇円
雑費	四・一八三円
計	四〇・五六八円
残高	七八二円

（大村記）

山行記録

一九五二・六～一九五三・五

○道場（六月廿八日）　川島・山本

○北丹後（六月廿九日）　久保先輩

○堡塁岩（七月六日）　大島先輩　山本・近・大村・宍戸・井上・三枝・田村

○保塁岩（七月十三日）　篠田先生・久保先輩・尾藤・川島・田島・坪井・山本・宮本・大村・本中・立花・井上・三枝・田村

○芦屋（七月十五日）　尾藤・川島・宮本・山本・大村・井上・三枝・田村

○揚柳山（七月廿日）　久保先輩

○夏山合宿（七月十八日～廿六日）　尾藤（C.L）川島（S.L）田島・坪井（装備）・山本（食糧）・宍戸（食糧）・東・近・宮本（記録）・大村（会計）・堀谷・本中・立花

十八日（雲後小雨）　近・堀谷を除く十一名で細野―神城―遠見小屋

十九日（小雨）　尾藤・東・宮本・大村で大遠見迄荷上げ他は停滞

廿日（晴ガス去来）　遠見小屋発（八・〇〇）―小遠見―大遠見―白岳沢出合―カクネ里キャンプサイト（一七・〇〇）B.Cは中沢出合附近のモレーンの上に設く。

廿一日（晴ガス）　午前中はテントの整備　午後は偵察。奥の雪渓（川島・坪井・宍戸・立花）。主稜方面（田島・山本）扇形残雪（尾藤・東・大村・宮本・本中）。

廿二日（晴ガス去来）　直接尾根（川島・坪井）　主稜（田島・山本）。ピーク・リッヂ（大村・宮本）。洞窟尾根（東・宍戸・本中）。白岳沢方面（尾藤・立花）。キレット小屋にて関学大杉本氏遭難の報に接す。杉本氏の冥福を祈る。

廿三日（晴）　キレット沢より天狗尾根（尾藤・東）キレット尾根左稜（川島・立花・本中）。キレット小屋（坪井）夕刻近・堺谷B・Cに到着

廿四日晴）荒沢（尾藤・坪井）。蝶型岩壁左稜（川島・宍戸）奥の雪渓　洞窟尾根（田島・東）。洞窟尾根（宮本・堺谷）扇谷残雪　天狗尾根（大村・立花・本中）。テント・キーパー（近・山本）

廿五日（晴・ガス・夕立）　中央ルンゼ（川島・山本）・扇形残雪　天狗尾根（田島・堺谷）。蝶型岩壁右稜（近・宮本）

廿六日（晴）　カクネ里合宿終了キャムプ撤収。川島・近は東谷計画の為キレット小屋に残り　他は冷へ東。宮本・立花は種池へ。他は冷沢に下る。

○東谷（七月廿六日〜廿日）　川島・近

廿六日（晴）　キレット小屋（一三・〇〇）―引返し（一六・三〇）―キレット沢の黒部側、助稜一つ北の台地で幕営（一八・三〇）

廿七日（晴後小雨）　幕営地発（八・〇〇）―キレット小屋（一一・〇〇）―五龍との最低鞍部（一三・三〇）―滝場で難渋（一五・〇〇〜一八・〇〇）―キレット小屋（二一・〇〇）

廿八日（風雨）　停滞

廿九日（風雪）　停滞

廿日（晴）　小屋―冷小屋―鹿島―大町

○針ノ木・立山方面（七月廿八日〜八月二日）

尾藤（L）・本中・田村・三枝

廿八日（曇後雨）　細野―大町―大出（九・三〇）―大沢小屋（一七・三〇）

廿九日（雨）　停滞

廿　日（曇）　大沢小屋（八・〇〇）―針ノ木峠（一二・〇〇）―針ノ木谷野営（一四・〇〇）

廿一日（雨）　出発（七・〇〇）―平小屋（八・三〇）

針ノ木谷は可成荒れており　渡渉十数回

八月一日、平小屋（八・〇〇）――五色小屋（一一三・〇〇）

二日　五色小屋（七・三〇）――立山温泉（一三・三〇～一四・四五）――粟巣野（一八・二〇）帰阪

ザラ峠から立山温泉のコースは実につまらない所だ。

○烏帽子方面（七月廿八日～八月一日）

大村・宍戸・浅井・他三名

廿八日（晴）　細野――大町――高瀬泉――濁沢

廿九日（雨）　停滞

卅日（曇）　濁沢――烏帽子――三ツ岳

卅一日（雨）　三ツ岳――烏帽子、強風にテント吹き飛ばされ烏帽子小屋に入る。

八月一日（曇時々雨）　烏帽子――濁沢――葛――大町

○度島槍、笠ヶ岳登走（七月廿六日～八月四日）

宮本・東・椎木・立花・堺谷・他一名

廿六日（晴）　南槍（一五・〇〇）――冷池（一六・二〇）――種池小屋跡（一八・三〇）

廿七日（晴後小雨）　種池（八・四〇）――針ノ木峠（一七・三〇）――大沢小屋附近幕営地（一八・二〇）　後発隊たる椎木他一名大町より到着。

廿八日（雨）　大沢発（一二・二〇）――針ノ木峠（一五・〇〇）――蓮華岳北方の幕営地（一六・〇〇）堺谷、立花は大町へ下る。

廿九日（風雨）　針ノ木小屋に避難、停滞

卅日（曇後晴）　幕営地（一三・四五）――北葛頂上（一六・二〇）――七倉岳（一八・二〇）――七倉小屋横にて幕営、北葛より新しき切開きあり。

卅一日（風雨）　停滞

八月一日（曇時々雨）　出発（一〇・〇〇）――船窓岳（一三・二〇）――不動岳（一六・五〇）――南沢岳（一八・四〇）――烏帽子小屋（二二・三〇）

二日（快晴）　停滞、連日の雨の後始末の為、椎木は葛温泉に下る。

三日（晴）　出発（六・四〇）――三ツ岳（七・四〇）――野口五郎岳（八・五〇）――水晶小屋跡（一一・三〇）――三俣蓮華小屋（一四・〇〇）――双六池（一六・五五）

四日（晴）　出発（七・二〇）――笠ヶ岳頂上（一三・三〇）――槍見温泉――猪尾

○聖岳方面（七月廿八日～八月四日）

田島・山木・広橋・関本

廿八日（曇）　伊那清島――木沢――梨木、軌道の起点より少し上流で幕営。

廿九日（雨）　梨木（軌道にて）―北又渡―辯天岩
飯場
卅日（曇後雨）　出発（六・一五）―西沢渡（一一・三〇）
小屋跡に幕営
卅一日（雨）　停滞
八月一日（曇後晴）　出発（七・一〇）―聖平野営地（六・四〇）
二日（快晴）　出発（六・〇〇）―聖岳（八・三〇）―兎岳
（一二・〇〇）―百間洞小屋（一四・三〇）百間洞小屋は無番
三日（晴・ガス）　出発（六・三〇）―赤石岳（一一・三〇）―
大聖寺平（一三・〇〇）―広河原（一六・三〇）―高山滝附
幕営（一八・三〇）
四日（晴）　出発（八・一〇）―小滝湯跡（一二・三〇）―釜沢
（一四・三〇）―大河原（一六・三〇）　小滝川は左岸に林道
あるも渡渉路の方が夏は便利と思はれる
○白山（八月十一日～十四日）　久保先輩
十一日　越美南線北濃駅―検峠―石徹白
十二日　石徹白―銚子峰―白山別山―白山
十三日　主峰剣峰大汝峰火口一周―大川温泉
十四日　白川村―美濃白鳥駅

白山は標高は高いがアルプス的な豪壮もなく、さりとて丹波高原等が持つある種の深さにも乏しい。冬は別として無雪期は笈ヶ岳方面や奥美濃とのコンビネーションを考へるべきであらう。石徹白からの縦走は先づその第一歩といふ所か。
○壓壘岩（八月十九日）　川島・田島・坪井・宮本・山本・井上
○道場（八月廿三日）　大島先輩・川島・田島・市比谷・山本
○岩壁（九月七日）　久保先輩・坪井
○尼子谷（九月廿日）　久保先輩・尾藤
○道場（十月十二日）　久保先輩・坪井
○雪彦山（十月十日～十三日）
川島・杢中・立花・鷺沢・田村・三枝・井上
○八ヶ岳（九月二九日～十月五日）
大久保先輩・加藤先輩・徳永先輩・住吉
松原湖―本沢温泉―赤岳往復―北八岳―平野
○赤石・荒川岳（十月八日～十月一四日）
尾藤・東
十日（晴）　本沢の前沢旅館を出発した我々は、三時間ばかり梨本軌道にゆられて大沢渡に到着、軌道を下りてすぐそ

ばの飯場で晝食をたいてもらひ、そこを出たのが十一時半ゆつくり登り始める。低い所ではそうでもなかつた木々の黄葉は、だんだん高くなるにつれて著しく秋山ならではの感が深い。六時後御に出る。すでにうす暗くて懐中電灯をつけて大沢岳に向つて進む（我々は五万分の一の地図にある道にたよつて行つたのであるが、すでにこの時は道を間違へていた）大沢岳の三角点を過ぎた頃からはつきりした道がわからなくなつて、踏み後と思はれる様な所を探しながら進んだが、どうしても小屋が見つからず遂にビバークと決める。その晩は比較的暖つたかくシエラーフにもぐり込んでは小松の上にばさつと横になると快適な寝心地だ。

十一日　曇後雨　日がさめてシエラーフからぬけ出した我々は一旦大沢岳の途中まで登つて小屋の屋根を認めたので、荷をまとめブツシユをかきわけて約一時間で小屋に到着、朝食をすませた頃から雨が降り出したので停滞と決める。

十二日　晴　八時百間羽の小屋を出発、どんより曇つていたが赤石の頂上ではすつかり晴れ上り、東方には日本一の富士山を見ることが出来た。西方からは非常に冷たい風が吹いて来るので耳がちぎれんばかり、休むのもそこそこにすぐ歩き出す。荒川小屋に着いたのが一時半、小屋の前で日向ぼっこをしていると、三人袋を背おつてこちらに向つて来る。ちよつと赤石に登つて来ようと小渡川から上つて来た土地の人で一晩中交代で火をたいていた。

十三日　晴　荒川小屋を七時十分に出発、十握もあらうと思はれる霜柱をさくさくとふみしめながらすじ荒川の登りにかゝる。荒川頂上では、新雪に覆われた北アルプスの連峰が眺められた（十一日の南アルプスの雨は北では雪だつたらしく、帰りの車中で知つたことであるが、その日に北穂と槍の間で神戸商大の遭難があつたのである）千枚岳は南側をまいて二軒小屋に向つて飛ぶ様に下る。あまりとばしたので大井川に出た時は、膝ががくがくふるへてとまらない。二軒小屋でしばらく休憩、その日の中に転付峠を越へて夜の新倉に着く。

時間記録

八日　二三・一〇大阪発

九日　六・四〇豊橋着―八・二〇豊橋発（電車）―十一・三〇清水着―十一・四〇清水発（バス）―十四・〇〇木沢着

十日　七・〇〇前沢旅館発―七・一五梨木軌道出発―十・三〇
～十一・三〇大沢渡―六・〇〇　稜線―八・〇〇ビバーク
十一日　五・三〇起床―六・四〇出発―七・三〇百間洞小屋着
―九・〇〇両ふり出す
十二日　八・〇〇百間洞発―十一・〇〇赤石頂上―一・三〇荒川
小屋着
十三日　七・一〇荒川小屋発―八・二〇～八・五〇荒川頂上―一〇・〇〇
悪沢頂上―十一・〇〇千枚岳をまく―一二・〇〇～一二・三〇
昼食―十四・〇〇大井川―一五・二〇二軒小屋発―一七・一〇
転付峠―二〇・二〇新倉着　（東　記）

○温戸スラブ（十月十九日）　川島・山本・立花
○岩船山（十月十八日）　久保先輩・坪井
○仁川（十月廿六日）　細見・由比浜・山本・土屋・鷲沢・南本・椎木・
三枝・井上
○湖北三重岳支峰武奈岳及戸ヶ岳（十月十九日～廿一日）
○仁川（十一月三日）　大鳥先輩・川島・田島・大村・立花
本中・鷲沢・三枝・田村
○中央アルプス縦走（十一月三日～九日）　久保先輩・坪井
小沢

四日（曇）　福島（一〇・五〇）―駒ノ湯（一二・二五）―六合
小舎（一八・〇〇）
五日（雨）
六日（晴）　六合発（七・二〇）―八合（八・四五）―九合（九・四五）
―上松小舎（一〇・三〇）―宝剣小舎（一二・三〇）―駒頂上（
一二・三〇）―濃ヶ池（一三・四〇）―宝剣小舎（一四・五〇）
七日（晴）　小舎発（七・二五）―桧尾岳（一一・〇〇）―熊
沢岳（一二・一〇）―東川岳（一四・五〇）―殿越コル（一五・一〇）
―殿越小舎（一五・三〇）
八日（晴）　小舎発（八・三〇）―空木岳（一〇・〇〇）―南駒
ヶ岳（一二・四〇）―空木岳（一四・一五）―小舎（一五・五〇）
九日（晴）　小舎発（六・〇〇）―北沢小舎（七・五〇）―中
八丁峠（九・五〇）―倉本着（一二・〇〇）
○惣河谷（十二月七日）　尾藤・東・坪井・三枝・田村
○惣河谷（十二月十四日）　川島・坪井・本中・立花・椎木・高田
三枝・田村・土屋・木村
○芦屋（十二月廿一日）　川島・田島・土屋・三枝・田村
冬山合宿
⑦　聖岳（一二月二三日～一月一日）　本文参照

②大沢（十二月廿九日〜一月三日）　久保定輩・坪井

廿日（晴）　大町―大出（一六・〇〇）―ヨセ沢合流点より少し上流右岸の小屋（一九・〇〇）泊

廿一日（曇時々小雪）　出発（一一・〇〇）―白沢（二二・〇〇）―扇沢（一五・〇〇）―岩小屋沢（一七・四〇）―大沢小屋（二一・〇五）。

一月一日（雪）　停滞

二日（晴）　晴なれど取日の多量の新雪よりして雪崩を懸念し、行動せず唯沢でスキー練習をする。結局雪崩は一つも出ず実にいまいまし、かつての早稲田の遭難の為、必要以上に恐れ過ぎて居た感あり。岩小屋沢岳最西のピークより下る尾根は春なら必ず使へると思ふ。

三日（雪）　出発（一一・〇〇）―大出（一六・四〇）―大町

③木曽駒（一二月二七日〜一月二日）

小舎を利用して木曽駒岳より南駒岳迄の縦走を計画したがラヂウスの故障、予備糧食の不足、悪天候の為　木曽駒登頂に終つた。

パーティ　川島（L）　東・近

二七日　大阪発（二三・一〇）

二八日（小雪）　上松着（九・四四）―　徳原清一郎氏（金懸小舎主）宅―（〇・三〇―一二・二〇）(4℃)―敬神滝小舎（二・五―三・〇〇）(0℃)―金懸小舎（六・〇〇）(-8℃)　積雪二十糎

二九日（快晴）　起床（五・〇〇）(-11℃)　発（八・四〇）―ラクダの背（九・三〇―九・四五）(-9℃)―六・七合目間（一一・四五―一二・三〇）

昼食。ラヂウス故障に気付く。―七・八合目間（二・〇〇）積雪三十糎。ワカンをはく。―八合目（四・〇〇）―硯石頂上（五・〇〇）―玉の窪鞍部（五・五〇―六・三〇）アイゼンをつける。―福島小舎跡（七・〇〇）Stを掘りビバーク。

三十日（晴）　起床（九・〇〇）(-16℃)　頂上小舎に入る（一二・〇〇）(-7℃)

三一日（ガス）　起床（八・〇〇）(-11℃)　発（一一・〇〇）。ガスの為下山の道を失い福島小舎跡迄半時間要す。―金懸小舎（四三〇）(-6℃)

一月一日（小雪）　起床（五・〇〇）(-6℃)　発（七・〇〇）―敬神小舎（八・四〇）(-3℃)。帰阪。

（川島記）

④細野スキー合宿（十二月廿三日〜廿一日）

細見（L）。由比浜・浅井・坐中・三枝・井上・高田・岡本・田村・鷺沢

○冬富士（一二月二八日〜一月二日）

德永先輩・加藤先輩・　吉田口より登頂

○伊吹山スキー（一月～二月二三日）

○芦屋（三月一日）　久保先輩・田島・久保

○大峯山（三月九日～十一日）　山本・広橋・他一名

九日（晴）　大阪―下市口―洞川（一二・〇〇）―洞辻（一六・〇〇）

十日（快晴）　洞辻（七・五〇）―山上ヶ岳（九・三〇）―稲村ヶ岳（一四・〇〇）―山上ヶ岳（一六・五〇）―洞辻（一七・五〇）　積雪は約五〇糎

十一日（曇後雨）　洞辻（八・三〇）―五番関（一〇・〇〇）―百丁茶屋（一一・〇〇）―新茶屋（一二・〇〇）―金峯神社（一四・三〇）―吉野

○後立山全縦走大沢頂寮（三月十七日～廿一日）

大島先輩・久保先輩・川島・住吉・田島（本文参照）

○後立山全縦走（三月廿二日～四月七日）（本文参照）

○志賀高原スキー（三月十八日～廿四日）　三枝・田村

○丹波高原（五月一日～二日）　久保先輩他二名

一日（曇）　江若比良駅―葛川越―坊村

二日（晴）　伊賀谷右候―八丁平―尾越―花背峠―鞍馬―大阪

○大峯山（五月一日～四日）　由比浜・山本・広橋

一日（曇）　大阪―下市口―川合（一三・〇〇）―栃尾辻（一六・三〇）―弥山小屋（二一・〇〇）

二日（曇時々雪）　出発（九・三〇）―仏経ヶ岳（一〇・〇〇）―楊子ヶ宿（一四・三〇）

三日（快晴）　出発（六・一五）―釈迦ヶ岳（一一・五〇）―前鬼（一四・四〇）―前鬼川―前鬼川河原（一八・〇〇）

四日（晴）　前鬼川―前鬼口―木本―大阪

○六甲（五月十七日）　久保先輩・川島

住吉川―ドビワリ―蛇谷―奥池―銚滝―小笠峠―逆瀬川―行者山麓部より猪谷へ

○道場（五月一日～三日）　尾藤・川島・田村・椎木

（山本記）

集會記録

六月一三日（於記念）

・地図の見方について

（近）

○穂高岳川・霞沢報告　（尾藤）

六月二〇日

○天候と天気図について　（坪井）

○夏山縦走計画発表　（坪井・東）

六月二七日

○夏山縦走計画追加発表　（田島・大村）

六月二九日　於道場

総　会

○昨年度報告　（家田）　○会計報告　（大村）

○装備報告　（川島）　○本会会則紹介　（家田）

○本年度計画発表（尾藤）　○篠田先生御感想

出席者　篠田先生、加藤OB、久保OB、家田、尾藤、川島、坪井、山本、大村、玄花、田村、井上、三枝

七月四日

○夏山の救急の予備知識　徳永OB

○未登攀地及びルート照介　大島OB

○夏山計画発表　尾藤

七月一一日

○カワ木研究会　○夏山縦走計画

七月一四日、一六日

○両日夏山準備会

八月八日

○夏山小報告会　○夏山整理

八月一五日、二二日、二九日、九月五日

現役リーダー会、冬山、春山の計画

九月一二日

○山小舎使用について　（尾藤）

九月一三日　於記念館ホール

○夏山報告会　○スイスアルプス天然色写真幻灯（大島OB）

九月一六日　リーダー会

○冬山計画　○〃山のつどい〃〃ヒマラヤ遠征隊につき〃

十月三日

○スキー合宿につき討議

十月一七日

○リーダー会報告　冬山目標発表　（尾藤）

○秋山報告　○神戸商大生遭難について批判

十月二四日

○輪読（文献紹介・立教報告）　東

○スキー合宿について　細見
○一一月秋山計画発表　川島・坪井
十月三一日
○輸読（文献紹介・立教報告）　宮本
○国体報告　篠田先生、大島OB
○学連報告　坪井
一一月一二日
○輸読（文献紹介・立教報告）　大村
○秋山報告　坪井
一一月二〇日　リーダー会
○春山目標、拡張案　○冬山計画
一一月二一日
○中アルプスの解説　川島
○リーダー会報告
一一月二八日
○南アルプス冬季の天候及び積雪状況　尾藤
○スキー合宿について　細見
○冬山としての各係の目標（食料係・天候記録）
一二月五日
○雪崩について　山本
○学連総会及び研究会報告　尾藤
一二月一二日
○冬山衣料について　尾藤
○岩登トレイニングに関する注意　川島
一二月一九日
○凍傷について　大久保OB
○冬山装備について座談会　徳永OB司会
○冬山合宿計画発表
一月九日
○簡単な冬山報告
一月一六日　於記念館ホール
冬山報告会　○聖ヶ岳パーティ　尾藤
○木曽駒岳パーティ　川島
一月二三日
○アンナプルナ書物紹介　篠田先生
リーダー会
○冬山反省
○春山計画について　尾藤

一月三〇日
○春山計画を論議

二月六日
○春山計画　○マナスル偵察隊報告会の感想　篠田先生

二月一三日
○春山計画細目打合せ

二月二一日
○ヒマラヤ遠征隊の装備について
○春山計画後立逆縦走について　篠田先生

二月二八日
○春山計画について

三月六日
○立教・関学の后立縦走について　尾藤
○縦走路　サポート隊使用のルート　尾藤
○春季後立の天候について　尾藤
○会計画予算　大村

三月一三日
○反大と後立縦走案について　大高
○偵察隊打合せ　○春山準備

三月二〇日　準備会
四月一〇日　○簡単な報告会
四月一七日　春山報告会
○計画の概略　尾藤　○偵察隊報告及び新越乗越へのルート　田島　○全計画行動の説明　尾藤
○アタック隊報告　川島　○食料報告　山本
○会計報告　尾藤　○反省及び感想　尾藤
○女子部負志鷲高原スキー行報告　三枝
四月二三日　リーダー会
○次年度リーダー川島君に決定　○今後の部の方針
四月二四日
○リーダー会報告　○五月初旬の山行について
◎一九五三年度
五月七日　現役リーダー会
○本年度の計画概要　○ナイロン・テント購入の件
○本年度リーダー
五月八日
○円波高原行報告　久保OB　○大峯行報告　山本
○新年度方針について　川島　○時報五号発行の件　尾藤

五月一五日

○新年度の挨拶　　篠田先生

○新入部員に　　川島

○各大学春山の報告　　大島OB・尾藤

○早大・アマンカグアの報告　　大島OB

○六月山行計画　　川島・尾藤

○春山会計報告　　大村

五月二二日

○焚火の話　　山本

○山で唄う歌

リーダー会

○夏山合宿について

五月二九日

○四国・笹ヶ峯行報告　　二木

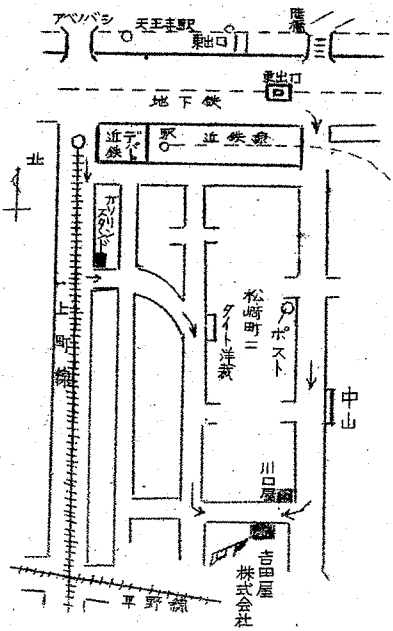
編集後記

○今回は大島OBに原稿をお願いした所、誠に示唆に富んだ一文を頂いて感謝に堪へない。

○今年度の山行がそうであった如く　斯報V号も丁度その優　記録を並べた形になった。研究論文（装備　食料　その他一般）が殆ど見当らないといふのも今年一ヶ年の山岳部のありのまゝの姿であった。

○山行記録では夏山合宿　秋山　冬山等は斯同記録だけではなく可成詳しく書き読めるものにした。

昭和二十八年六月
大阪大学山岳会「斯報」　第V号
発行所　大阪市北区常安町　大阪大学学生課内　大阪大学山岳会
編集責任者　尾藤　昭二
印刷所　大阪市西区江戸堀北通二丁目一七　美研社



大正九年より伝統のある吉田屋の山靴・スキー靴

吉田屋株式會社

大阪市阿倍野区
松崎町二丁目三八番地
電話天王寺㈦九五四一番

会長		篠田重治		大阪市都島区東野田9丁目	阪大工学部内
				豊中市麻田97	
先輩	医	大久保克己		岸和田市南町1551 ㊤岸和田 1601～5	市民産業厚生病院内
	〃	伊藤俊夫		尼崎市南明町1の13 ㊤尼崎 373	阪大産婦人科
（昭和二十四年以後）	〃	德永篤司		大阪市東淀川区十三東之町	阪大小沢科科
	〃	松久樹		大阪市南区桃谷町15	阪大吉田内科
	理	大高輝夫		神戸市東灘区御影町西平野15 ㊤御影 3808	住友化学
	〃	加藤幹夫		豊能郡箕面町牧落730 ㊤桜井 258	阪大本城研究室
	工	久保三朗		大阪市南区北桃谷町18 ㊤南 790	住友金属
	医	家田干喜		豊能郡箕面町桜井4の2	インターン
	理	細見一仁		大阪市福島区上福島南2丁目	理学部大学院
	経	田島汎		芦屋市宮川町130 ㊤芦屋 2210	住友金属
現役医	4	住吉仙也		西宮市羽衣町97 ㊤西宮 316	
	3	尾藤昭二		泉北郡信太村聖ヶ丘	
	3	小沢逞夫		芦屋市三條通67	
	3	東雍		大阪市阿倍野区阪南町中6丁目16	
	2	坪井吉之助		布施市稲田1614	
	1	宍戸元		豊能郡箕面町417	
	1	田村千英子		吹田市垂水247の3	
薬	4	柏忍男		大阪市旭区大宮西之町1丁目41	
	3	三枝礼子		西宮市鳴尾町砂浜新田38	
		井上一枝		神戸市東灘区御影町一里塚1093	
理	4	大村一生		豊中市岡町南5132 ㊤豊中 3090	
理	4	浅井力		神戸市須磨区天神町	
工	4	三木節夫		尼崎市潮江 ブゼン寺	
	4	西宮誠裕		大阪市阿倍野区相生通3丁目15 ㊤天下茶屋 2956	

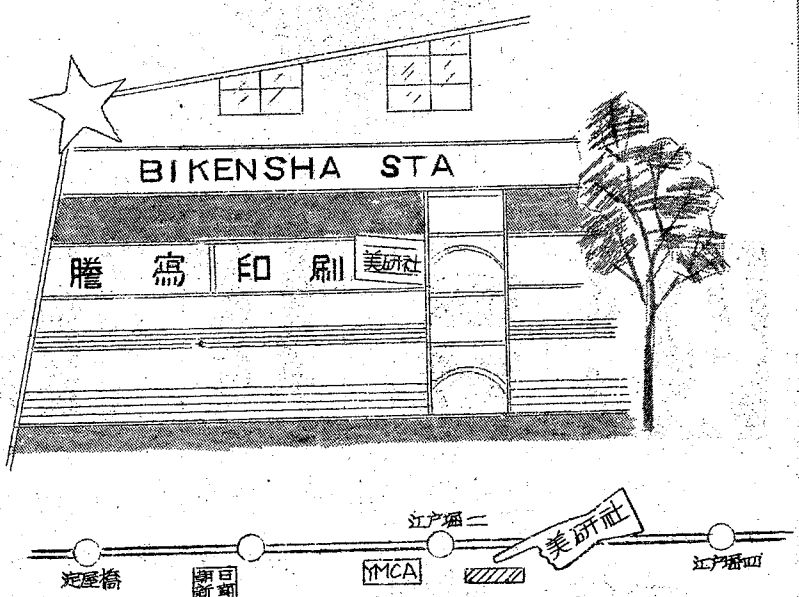
	4	川島	勇	神戸市長田区西丸山町2114
	4	宮本	貞雄	尼崎市武庫之荘4丁目30
	4	近	章三	大阪市阿倍野区玉出町2628
	3	蕨井	博	豊能郡箕面町分宮257
法	4	山本	光二	芦屋市宮川町13 ㊐芦屋 3648
経	4	土屋	直	芦屋市楠町57 ㊐ 芦屋 3648
	3	由比浜	哲也	西宮市今津町六石町1845
	3	広橋	茂	西宮市末広町5
北校 法経	2	木村	裕	大阪市城東区放出町356
工	2	鷲沢	区	
	2	至中	勝	豊能郡箕面町牧落3861
	2	立花	直治	神戸市生田区中山手通7丁目8
	2	鳴海	淑雄	芦屋市打出翠ケ丘53
理	2	山本	進一郎	豊能郡箕面町箕面43
工	1	丸山	明雄	西宮市大井手町19 T西宮1534
工	1	西川	元夫	大阪市東淀川区下新庄町2n151
工	1	野村	博一	中河内郡布津町鴻池新田 阪大 鴻池寮内
工	1	宮腐	一雄	池田市 畑町 1418
理	1	三木	隆	兵庫県川辺郡西谷村 平井荘
南校 工	2	椎木	二郎	堺市柳之町3丁目22
S	2	岡本	嶋裕	和歌山市 浜町 260

謄寫印刷は

早い！ 安い!! 美しい!!!

美研社

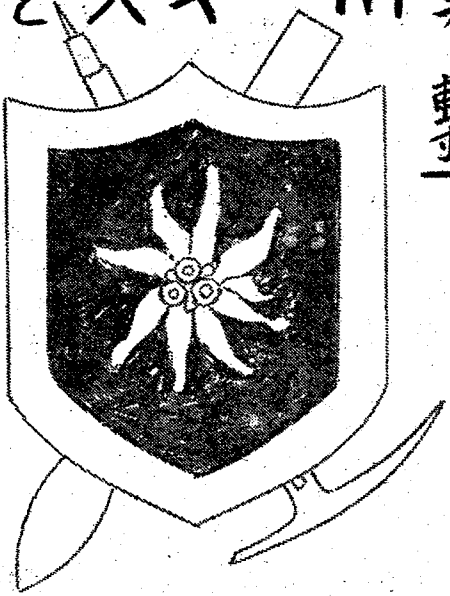
市電 江戸堀2 電停前西
電話 土佐堀 ㊹ 5008番



日本最古の

山とスキー用具

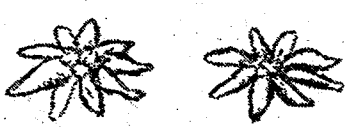
専門店



好日山荘

大阪・北区・堂ビル前　協銀ビル三階

TEL 福島(45) 7745



好日山荘

東京・大阪・神戸

○ スイス製 ウイリッシュ モデル ピッケル
○ スエーデン製 プリムス バーナー
○ ドイツ製 ベッアルト コンパス
○ 〃 高度計

品人待望の外国製品入荷

美津濃 新製

ナイコンテント

6月29日（午後5時30分）

信州山の映画会 会場 中央公会堂

7月末日迄 信州の山と高原展 会場 美津濃

大阪 **美津濃** 淀屋橋